

# 資料編

以下は、インド哲学最大の学派の一つ、ヴァイシェーシカ学派の重要な文献である『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』(Prāśastapādabhāṣya : 6C. AD.)の要約

## 『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』実体の章(dravya-prakarana)・知識の章(buddhi-prakarana)

・中村 元『ヴァイシェーシカ学派の原典』『東洋文化研究所年報』10-11 (Vaiśeṣika-sūtraとPadārthhadīśanugraha) 1977/78年

・本多 道『ヴァイシェーシカ学派の原典』実務刊行会・1990年

これらの和訳は、ヴァイシェーシカ学派の理解に大いに貢献している。しかし、これらが公刊された後に、注釈書の新版や復元が公刊され、現在以上記の諸刊行時より利用できる資料が揃っており、テキストとその和訳について、より良い和訳が可能になっているので、敢えて和訳を示す。

### 和訳

和訳の解題は、以下の二点にある。

(1) 同学派の根本聖典である『ヴァイシェーシカ・スートラ』(Vaiśeṣikasūtra : 100-200) の引用と考えられるもの、あるいは内容的に関連するものは、全て脚注に原文を示し、和訳を付した。

本研究では、この『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』をヴァイシェーシカ学派の聖典を代表する文献と捉えているので、根本聖典との内容の関連性を把握しやすいようにした。

(2) 知識の章では、それぞれの認識の因果論的規定を脚注に示した。

本研究では、認識論が因果論によって基礎づけられていることを明らかにすることを目的の一つとしたため、脚注の中で因果論的規定がよく示されている『ヴィヨマヴァティー』によって、内因性・非内因性・動力因というプラシャスタパーダ独自の因果論的規定を明示した。

和訳のテキストは、『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』は、もともと研究者の間で使用されている参考文献表のPBh(1)を基本にし、高崎館本を対照した。また『ヴァイシェーシカ・スートラ』は、同じく参考文献表のVSCを使用した。

### 凡例

- (1) 章節の分け方は、PBh(1)にしたがった。
- (2) サンスクリット原文の番号は、<>でPBh(1)の番号を、[]でWPRの番号を付した。
- (3) サンスクリット原文の複合語は、省略語として成立しているものを除いて、構成語をハイフンでつないだ。連声をもとに戻した時は、アンダーバーをつけた。
- (4) 各章節の題は、筆者が便宜的につけたものである。
- (5) 和訳本文の○は、原則的に通解のために筆者が補った言葉であるが、それが注釈の記述による場合は、それを注に付し、必要と思われるときは原文と和訳を示した。
- (6) 和訳本文では、『ヴァイシェーシカ・スートラ』は、『スートラ』と略した。

## はしがき

以下は、インド正統派六派哲学の一つ、ヴァイシェーシカ学派の重要な文献である『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』(Praśastapādabhāṣya : 6C. AD. )の実体の章(dravya-prakaraṇa)と知識の章(buddhi-prakaraṇa)の和訳である。

『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』には、すでに以下の三つの和訳研究がある。

- ・金倉円照『インドの自然哲学』平楽寺書店・1971年
- ・中村 元「ウ・アイシェーシカ学派の原典」『三康文化研究所年報』10・11 (Vaiśeṣika-sūtraとPadārthadharmasaṅgraha) 1977/78年

- ・本多 恵『ウ・アイシェーシカ哲学体系』国書刊行会・1990年

これらの和訳は、ヴァイシェーシカ学説の理解に大いに貢献している。しかし、これらが公刊された後に、注釈書の新版や複注が公刊され、現在は上記の諸訳刊行時より利用できる資料が増えており、テキストとその解釈について、より良い理解が可能になっているので、敢えて拙訳を示す。

拙訳の特徴は、以下の二点にある。

(1) 同学派の根本聖典である『ヴァイシェーシカ・スートラ』(Vaiśeṣikasūtra : 100~200) の引用と考えられるもの、あるいは内容的に関連するものは、全て脚注に原文を示し、和訳を付した。

本研究では、この『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』をヴァイシェーシカ学派の学説を代表する文献と捉えているので、根本聖典との内容の関連性を対照しやすいようにした。

(2) 知識の章では、それぞれの認識の因果論的規定を脚注に示した。

本研究では、認識論が因果論によって基礎づけられていることを明らかにすることを目的の一つとしたため、諸注釈の中で因果論的規定がよく示されている『ヴィヨマヴァティー』によって、内属因・非内属因・動力因というプラシャスタパーダ独自の因果論的規定を明示した。

翻訳のテキストは、『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』は、もっとも研究者の間で使用されている参考文献表のPBh(1)を底本にし、適時諸本を対照した。また『ヴァイシェーシカ・スートラ』は、同じく参考文献表のVSCを使用した。

## 凡例

- (1) 章節の分け方は、PBh(1)にしたがった。
- (2) サンスクリット原文の番号は、<>でPBh(1)の番号を、[]でWPRの番号を付した。
- (3) サンスクリット原文の複合語は、術語として成立しているものを除いて、構成語をハイフンでつないだ。連声をもとに戻した時は、アンダーバーをつけた。
- (4) 各章節の題は、筆者が便宜的つけたものである。
- (5) 和訳本文の( )は、原則的に理解のために筆者が補った言葉であるが、それが注釈の記述による場合は、それを注に付し、必要と思われるときは原文と和訳を示した。
- (6) 和訳本文では、『ヴァイシェーシカ・スートラ』は、『スートラ』と略した。



# 第1部 実体の章(dravya-prakarāṇa)

## 1 実体の共通性

<20>[16] pṛthivy-ādīnaṃ navānāṃ api dravyatva-yogaḥ svātmāny  
ārambhakatvaṃ guṇavattvaṃ kārya-kāraṇa-avirodhitvaṃ antya-  
viśeṣavattvaṃ |

<21> anāśritatva-nityatve ca anyatra-avayavi-dravyebhyaḥ ||

<22>[17] pṛthivy-udaka-jvalana-pavana-ātma-manasām anekatva-apara-  
jātimattve ||

<23>[18] kṣiti-jala-jyotir-anila-manasām kriyāvattva-mūrtatva-paratva-  
aparatva-vegavattvāni ||

<24>

[19] ākāśa-kāla-dig-ātmanāṃ sarva-gatatvaṃ paramahattvaṃ sarva-  
saṃyogi-samāna-deśatvaṃ ca ||

<25> [20] pṛthivy-ādīnāṃ pañcānāṃ api bhūtatva-indriya-prakṛtitva-  
bāhya-ekaika-indriya-grāhya-viśeṣa-guṇavattvāni ||

<26> caturṇāṃ dravya-ārambhakatva-sparśavattve ||

<27> trayāṇāṃ pratyakṣatva-rūpavattva-dravatvāni ||

<28> dvayor gurutvaṃ rasavattvaṃ ca ||

<29> [21] bhūta-ātmānāṃ vaiśeṣika-guṇavattvaṃ ||

<30> [22] kṣity-udaka-ātmanāṃ catur-daśa-guṇavattvaṃ ||

<31> [23] ākāśa-ātmanāṃ kṣaṇa-ekaika-deśa-vṛtti-viśeṣa-guṇavattvaṃ ||

<32> [24] dik-kālayoḥ pañca-guṇavattvaṃ sarva-utpattimatām nimitta-  
kāraṇatvaṃ ca ||

<33> [25] kṣiti-tejasor naimittika-dravatva-yogaḥ ||

<34> [26] evaṃ sarvatra sādharmyaṃ viparyayād vaidharmyaṃ ca vācyam  
iti dravya-asaṃkaraḥ ||

地等の9つ（の実体）全てには、<実体性>と結びつくこと、自身において（内属した）<sup>1</sup>結果を発生させること、属性を持つこと、原因や結果と矛盾しないこと、最終の特殊を持つこと、がある。

他に依存しないことと常住であることが、構成部分のある実体以外<sup>2</sup>にある。

地・水・火・風・自我・意識に、多性と下位の種類を持つことがある。

<sup>1</sup>NKにより補う。

Cf. NK : svātmānyā-ārambhakatvatvam iti | sva-samaveta-kārya-janakatvam ity arthaḥ | (PBh(1) : p. 21, ll. 2~3)

<sup>2</sup>構成部分のない実体とは、原子のことである。

地・水・火・風・意識には、活動性、有形性<sup>3</sup>、かなた性、こなた性、勢い(速力・推進力：vega)を有することがある。

虚空・時間・方角・自我には、遍在性、極大性、そして、全ての結合者(すなわち有形の実体)<sup>4</sup>の共通の場所であることがある。

地等の5つ全てに、元素であること、感覚器官の質料因であること、一つ一つの外部の感覚器官に知覚される特殊な属性を持つことがある<sup>5</sup>。

(地・水・火・風の)4つに、実体を造り出すことと有触性がある。

(地・水・火の)3つに、直接知覚されること、有色性、流動性がある。

(地・水の)2つに、重さと味を有することがある。

(地・水・火・風の)元素と自我に、(それ自身に)独特な属性を持つことがある。

地・水・自我には、14の属性を持つこと、がある。

虚空と自我には、瞬間的でおのおのの部分に存する特殊な属性を持つこと、がある。

方角と時間には、5つの属性を持つことと、全ての生成されたものの動力因たること、がある。

地と火は、動力因から生じた<sup>6</sup>流動性と結びつく。

このようにして、全ての同性質が(言われた。)そして、異なった(形で)異性質が言われるべきである。したがって、実体には混乱がない。

## 2 実体の個別性

<35> iha\_idānīm ekaikaśo vaidharmyam ucyate ||

さて、今から一つ一つ異性質が述べられる。

### (1)地 (pṛthivī)

<36>

[27] pṛthivī-tva-abhisambandhāt pṛthivī | rūpa-rasa-gandha-sparsa-saṃkhyā-parimāṇa-pṛthaktva-samyoga-vibhāga-paratva-aparatva-gurutva-dravatva-saṃskāravatī | [28] ete ca guṇa-viniveśa-adhikāre rūpa-ādayo guṇa-viśeṣāḥ siddhāḥ | cākṣuṣa-vacanāt sapta saṃkhyā-ādayaḥ | patana-upadeśād gurutvam | adbhiḥ sāmānya-vacanād dravatvam | uttara-karma-vacanāt saṃskāraḥ | [29] kṣitāv eva gandhaḥ | rūpam aneka-prakāram śukla-ādi | rasaḥ ṣaḍ-vidho madhur-ādiḥ | gandho dvi-vidhaḥ surabhir asurabhiś ca | sparso ' syā anuṣṇa-aśītatve satī pākajaḥ | [30] sā

<sup>3</sup>ここで有形性と訳した「mūrta-tva」の「mūrta」とは「凝結する・凝固する」という意味の動詞「mūrch」の過去分詞であり、したがって「mūrta-tva」原義は「中身のつまったもの」という意味合いである。また、『勝宗十句義論』では「有質礙」という訳語になっている。

<sup>4</sup>ここでsarpa-samyoginは、NKおよびVyによれば有形の実体(mūrta-dravya)である。

<sup>5</sup>地・水・火・風・虚空は、それぞれ鼻・舌・目・肌・耳という感覚器官に1対1で対応している。

<sup>6</sup>naimittikaは、NKによれば「nimittaから生じた」の意味とする。

tu dvi-vidhā nityā ca\_anityā ca | paramāṇu-lakṣaṇā nityā | kārya-lakṣaṇā  
 tv anityā | sā ca sthairya-ādy-avayava-sanniveśa-viśiṣṭā 'para-jāti-bahu-  
 tvopetā śayanāsana-ādy-aneka-upakāra-karī ca |[31] śarīraṃ dvi-vidham |  
 yonijaṃ ayonijaṃ ca | tatra-ayonijaṃ anapekṣya śukra-śoṇitaṃ deva-  
 rṣiṇaṃ śarīraṃ dharma-viśeṣa-sahitebhyo ' ṇubhyo jāyate |  
 kṣudrajantūnāṃ yātanā-śarīrāṇy adharmā-viśeṣa-sahitebhyo ' ṇubhyo  
 jāyante | śukra-śoṇita-sannipāta-jaṃ yonijaṃ | tad dvi-vidhaṃ jarāyujam  
 aṇḍajaṃ ca | mānuṣa-paśu-mṛgāṇāṃ jarāyujam | pakṣi-sarīṣṭpāṇāṃ  
 aṇḍajaṃ | [32] indriyaṃ gandha-vyañjakaṃ sarva-prāṇināṃ jala-ādy-  
 anabhibhūtaiḥ pārthiva-avayavair ārabdhaṃ ghrāṇaṃ | [33] viśayas tu  
 dvyaṅka-ādi-krameṇa\_arabdhas tri-vidho mṛt-pāṣāṇa-sthāvara-lakṣaṇaḥ  
 | tatra bhūpradeśāḥ prakāra-iṣṭaka-ādayo mṛt-prakārāḥ | pāṣāṇā upala-  
 maṇi-vajra-adayaḥ | sthāvarās tṛṇa-oṣadhi-vṛkṣa-latā-avatāna-  
 vanaspataya iti ||

地性との結合ゆえに、地である。地は、色・味・香り・触・数・量・別異性・結合・分離・  
 かなた性・こなた性・重さ・流動性・潜勢力を持つ。

そして、この2項目は、(『スートラ』の)「属性を配置する章」<sup>7</sup>という章節に  
 おいて、色などが(地に)特徴的な属性として証明されている。「眼によって認め  
 られる」<sup>8</sup>と(『スートラ』に)述べられているので、数などの7つの属性(=数・  
 量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性)が、証明されている。「落下」<sup>9</sup>という  
 (『スートラ』の)教示ゆえに、重さが証明される。「水と等しい」<sup>10</sup>と(『スー  
 トラ』に)述べられているので、流動性がある。「以後の運動」<sup>11</sup>と(『スートラ』  
 に)述べられているので、潜勢力がある。

香りは地のみにある。(地の)色は、白を始めとして様々な種類がある。味は、  
 甘さを始めとして6種類である。香りは、芳香と悪臭の2種類である。その(地の)  
 触は、熱くもなく冷たくもない性質であり、焼いて作られる性質(pākaja)がある。

しかし、それ(地)は、2種類ある。(すなわち)常住なものと無常なものであ  
 る。常住なものは、原子(paramāṇu)を特徴とし、一方無常なものは、(原子の  
 集合の)結果を特徴とする。そして、それ(結果としての地)は、堅さなどと部分  
 の配列に特徴づけられており、多くの下位の種類を持ち、またイスやベッドなど多

<sup>7</sup>Cf. VS : rūpa-rasa-gandha-sparśavatī pṛthivī | 2-1-1(VSC : p. 11, l. 4) (地は、色・味・香り・  
 触を持つ)

<sup>8</sup>Cf. VS : saṃkhyāḥ parimāṇāni pṛthaktvaṃ saṃyoga-vibhāgau paratva-apatve karma ca  
 rūpi-dravya-samavāyāc cākṣuṣāṇi | 4-1-12 (VSC : p. 33, ll. 21~22) (数・量・別異性・結合と分離・かなた性  
 とこなた性、そして、運動は色のある実体と内属するので、眼によって知覚される。)

<sup>9</sup>Cf. VS : saṃyoga-abhāve gurutvāt patnam | 5-1-7(VSC : p. 38, l. 4) (結合がない時、重さゆ  
 えに落下がある。)

<sup>10</sup>Cf. VS : sarpir-jatu-madhūcchiṣṭānāṃ pārthivānām agni-saṃyogād dravatā ' bdiḥ  
 sāmānyam | 2-1-6 (VSC : p. 11, ll. 22~23) (火との結合による、地である醍醐・ニカワ・蠟の流動性は、水と  
 共通である。)

<sup>11</sup>Cf. VS : nodanād ādyam iṣoḥ karma karma-kāritāc ca saṃskārād uttaram  
 tathā\_uttaramuttaram ca | 5-1-17(VSC : p. 39, ll. 9~10) (打撃から第一の矢の運動が生じ)、(その)  
 運動から生じた潜勢力から、次の(運動が生じる。))このようにして、次々と(運動が生じる。))

くの役に立つものを生みだす。)

(このうち)「身体は、2種類であり、胎生と非胎生である。」<sup>12</sup>

この中で、(a)非胎生は、神・聖仙の精子や血に基づかない身体であり、特殊な善(dharma)と結合した原子(aṇu)から生じる。小動物の処罰ある身体<sup>13</sup>は、特殊な悪(adharma)と結合した原子(aṇu)から生じる。

(b)胎生は、精液と血が結合して生じる。これ(胎生)は、胎児生と卵生の2種類である。人間・家畜・野獣が胎生であり、鳥や爬虫類が卵生である。

感覚器官は、全ての生物の臭いを明らかにする、水などに妨げられない地の部分から作られた鼻(嗅覚器官)である。

一方対象は、二重原子(dvi-aṇuka)の順序で作られ、粘土・石・植物を特徴とする3種類である。

その中で、(a)粘土の部類は、地面・壁・レンガなどである。(b)石の部類は、岩石・宝石・ダイヤモンドなどである。(c)植物の部類は、草・薬草・木・つる草・やぶ・果樹である。

## (2)水(ap)

<37>

[34] aptva-abhisambandhād āpaḥ | rūpa-rasa-sparśa-dravatva-sneha-saṃkhyā-parimāṇa-prthaktva-saṃyoga-vibhāga-paratva-apatva-gurutva-saṃskāravatyāḥ | [35] pūrvavad eṣaṃ siddhiḥ | [36] śukla-madhura-śītā eva rūpa-rasa-sparśāḥ | sneho 'mbhasy eva sāmsiddhikaṃ ca dravatvam | [37] tās ca pūrvavad dvi-vidhāḥ nitya-anitya-bhāvāt | tāsāṃ tu kāryaṃ tri-vidhaṃ śarīra-indriya-viṣaya-saṃjñakam | [38] tatra śarīram ayonijam eva varuṇa-loke pārthiva-avayava-upaṣṭambhāc ca upabhoga-samartham | [39] indriyaṃ sarva-prāṇināṃ rasa-vyañjakam vijāty-anabhibhūtair jala-avayavair ārabdham rasanam | [40] viṣayas tu sarit-samudra-himakaraka-ādih ||

<水性>と結合するので、水である。(水は)色・味・触・流動性・粘着性・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・重さ・潜勢力を持つ。この証明は、前に述べた通り<sup>14</sup>。(水の)色は白、味は甘く、触は冷に他ならない。粘着性は、水において

<sup>12</sup>Cf. VS : aneka-deśa-pūrvakatvāt | 4-2-4 (VSC : p. 35, l. 18.) (多くの点(諸原子)に基づいていることから(胎生・非胎生の身体が生じる)。)

<sup>13</sup>「小動物の処罰ある身体」とは、諸註釈によれば虻や蚊・ぶよ等であり、処罰とは苦しみのことである。

Cf. NK : kṣudrajantavo daṃśa-māsaka-ādayas teṣāṃ yātanā piḍā duḥkham iti yāvat tad-arthaṃ śarīraṃ yātana-śarīram | (PBh(1) : p. 33, ll. 19~20).

Kir : kṣudrajantūnāṃ māsaka-ādīnāṃ yātanā-śarīraṇi | (Kir : p. 39, ll. 4~5)

<sup>14</sup>Cf. VS : rūpa-rasa-sparśavatya āpo dravāḥ snigdhas ca | 2-1-2(VSC : p. 11, l. 9) (水は、色・味・触を持ち、流動性と粘着性を持つ。)

この他に、数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性という諸属性は、地と共通の属性であるので同上4-1-12の「数・量・別異性・結合と分離・かなた性とこなた性、そして、運動は色のある実体と内属するので、眼によ



のみ存在し、流動性は（水の）本質的性質である。

これ（水）は、前述の通り2種類ある。なぜなら、常住なものと同様なものがあるからである。一方、これ（水）の結果は3種類であり、身体・感覚器官・対象と呼ばれている。

その中で、身体は非胎生のみであり、ヴァルナ<sup>15</sup>の世界において存在し、地の部分に支えられているので、享受することが出来る。

感覚器官は、全ての生物に味を示すものであり、異種のものに妨げられない水の部分によって作られた舌（味覚器官）である。

一方対象は、川・海・雪・霜などである。

### (3)火(tejasa)

<38>

[41] tejustva-abhisambandhāt tejaḥ | rūpa-sparśa-saṃkhyā-parimāṇa-prthaktva-samyoga-vibhāga-paratva-apatva-dravatva-saṃskāravat | [42] pūrvavad eṣāṃ siddhiḥ | [43] tatra śuklaṃ bhāsvaram ca rūpam | uṣṇa eva sparśaḥ | [44] tad api dvi-vidham aṇu-kārya-bhāvāt | kāryam ca śarīra-ādi-trayam | [45] śarīram ayonijam eva āditya-loke pārthiva-avayava-upaṣṭambhāc ca upabhoga-samartham | [46] indriyam sarva-prāṇinām rūpa-vyañjakam anya-avayava-anabhibhūtais tejas-avayavair ārabdham cakṣuḥ | [47] viṣaya-saṃjñakam catur-vidham | bhaumaṃ divyam udaryam ākarajam ca | tatra bhaumaṃ kāṣṭha-indhana-prabhavam ūrdhvajvalana-svabhāvam pacana-dahana-svedana-ādi-samartham divyam abindhanam saura-vidyud-ādi bhuktasya āhārasya rasa-ādi-pariṇāma-artham udaryam ākarajam ca suvarṇa-ādi | tatra saṃyukta-samavāyād rasa-ādy-upalabdhir iti ||

火性と結合するので、火である。色・触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・流動性を持つ<sup>16</sup>。これらの証明は、前述の通り<sup>17</sup>。その中で、色は白と輝きである。触は、熱のみである。

また、それ（火）は、原子（aṇu）と結果の状態があるので、2種類である。そして結果は、身体などの3つである。

て知覚される」という部分を根拠としていられる。

<sup>15</sup>ヴァルナ (Varuṇa) は、『リグ・ヴェーダ』の司法神であり、天則（リタ）と掟（ヴァラタ）を護持し、大自然・祭祀・人倫の秩序を保つ。水とも関連が深く、例えば『マハーバーラタ』に以下の記述がある。

「クリタ・ユガ期に神々がヴァルナに近づいて言った。「あなたは水の王者にならなければなりません。ちょうどインドラが我々を支配しているように。あなたは、海の真ん中に住むことができます。世界中の全ての川とその夫である大海もあなたに従うでしょう。あなたは月とともに満ち、欠けるでしょう。」ヴァルナがこの要請にこたえたので、神々はヴァルナを水の王者とした。」（『マハーバーラタ』シャリヤ編）菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂書店・1985年71～72頁参照。

<sup>16</sup>Cf. VS : tejo rūpa-sparśavat | : 2-1-3(VSC : p. 11, l. 13) (火は、色と触を持つ。)

<sup>17</sup>さらに、水と同様に地との共通の属性であるので、地で指摘されたストトラが根拠になっている。



身体は、非胎生のみで、アーディトヤ（太陽）<sup>18</sup>の世界にあり、地の部分に支えられるので、享受が出来る。

感覚器官は、全ての生物に色を示すものであり、他の部分に妨げられない、火の部分によって作られた、眼である。

対象と呼ばれるものは、4種類である。（すなわち）(a)大地に属するもの、(b)天上のもの、(c)腹部に属するもの、(d)鉱山産のものである。

(a)その中で、大地に属するものは、木材を燃料として生じ、燃え上がることを本性としており、煮たり焼いたり発汗させたりするなどの能力がある。

(b)天上のものは、水を燃料とし、太陽に関するものや閃光などである。

(c)腹部に属するものは、食べた食物の汁等を消化するのに役に立つ。

(d)そして、鉱山産のものは、黄金などである。その中で、結合したもの（地など）<sup>19</sup>の内属（した属性）により、味などが知覚される。

#### (4)風(vāyu)

<39>

[48] vāyutva-abhisambandhād vāyuh | sparsā-saṃkhyā-parimāṇa-prthaktva-saṃyoga-vibhāga-paratva-apatva-saṃskāravān | [49] arūpiṣv acākṣuṣa-vacanāt sapta saṃkhyā-ādayaḥ | tṛṇa-karma-vacanāt saṃskāraḥ | [50] sa ca ayam dvi-vidho ' ṇu-kārya-bhāvāt | [51] tatra kārya-lakṣaṇaś catur-vidhaḥ śarīram indriyaṃ viśayaḥ prāṇa iti | [52] tatra ayonijam eva śarīram marutām loke pārthiva-avayava-upaṣṭambhāc ca upabhoga-samartham | [53] indriyaṃ sarva-prāṇinām sparsā-upalambhakam pṛthivy-ādy-anabhibhūtair vāyv-avayavair ārabdham sarva-śarīra-vyāpi tvag-indriyam | [54] viśayas tu upalabhya-māna-sparsā-adhiṣṭāna-bhūtaḥ sparsā-śabda-dhṛti-kampa-liṅgas tiryag-gamana-svabhāvo megha-ādi-preraṇa-dhāraṇa-ādi-samarthaḥ | [55] tasya aparatyakṣasya api nānātvam saṃmūrccchanena anumiyate | sammūrccchanam punaḥ samānaja-vayor vāyvor viruddha-dik-kriyayoḥ sannipātaḥ so ' pi sāvayavinor vāyvor ūrdhvagamanena anumiyate tad api tṛṇa-ādi-gamanena iti | [56] prāṇo ' ntaḥ-śarīre rasa-mala-dhātūnām preraṇa-ādi-hetur ekaḥ san kriyā-bhedād apāna-ādi-saṃjñām labhate ||

<sup>18</sup>アーディトヤ(Āditya) は、アディティ (Aditi : 『リグ・ヴェーダ』の無垢の女神) の子の意味で、通常は複数形で表され、『リグ・ヴェーダ』に出てくるヴァルナ、ミトラ、アリヤマン、バガ、ダクシャ、アンシャの6神があげられる場合(2-27-1)、ダクシャとバガの代わりにサヴィトリが加えられて5神とされる場合、あるいはミトラ、ヴァルナ、ダートリ、アリヤマン、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、アーディトヤ(太陽)の8神があげられる場合(10-72-8)などがある。全体として、太陽の光との関係が強く表されており、アーディトヤは単数形では太陽と同義語となった。

後に、アーディトヤ「神群」として12神を数えるようになり、叙事詩では、聖者カシュヤパとアディティとの間に生まれたダートリ、ミトラ、アリヤマン、インドラ、ヴァルナ、スーリヤ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリ、ヴィシヌの12人の子供を指すようになった(『マハーバーラタ』初編・59・14-15)。菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂書店・1985年22頁参照。

<sup>19</sup>NKにより補う。

風性と結合するので、風である。触・数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・潜勢力を持つ<sup>20</sup>。

「無色のものにおいては、眼により認められない。」<sup>21</sup>と（『スートラ』）言われているので、数などの7つ（の属性）がある。

「草の運動」<sup>22</sup>と（『スートラ』に）言われているので、潜勢力<sup>23</sup>がある。

またこれ（風）は、原子（*aṇu*）の状態と結果の状態があるので、2種類である。その中で、結果を特徴とするものは、身体・感覚器官・対象・氣息<sup>24</sup>の4種類である。

その中で、身体は、非胎生のみであり、マルト（風神）<sup>25</sup>の世界にあり、また、地の部分に支えられるので、享受することが出来る。

感覚器官は、全ての生物に触を知覚させ、地などに妨げられない風の部分によって作られた全身を包んでいる皮膚（触覚器官）である。

一方、対象は、知覚されるべき触の観念の拠り所のものであり、触・声・静止・振動を特徴とし、横への運動を本質とし、雲などを動かしたり静止させたりする能力がある。

また、これ（風）は、直接知覚できないが<sup>26</sup>、多様性が（風が）集積すること（*saṃmūrccana*）により、推知される<sup>27</sup>。集積すること（*saṃmūrccana*）とは、つまり、後方で、同じ速さの2つの風が相反する方角からやって来て衝突すること

<sup>20</sup>Cf. VS : *vāyuh sparsāvān* | 2-1-4 (VSC : p. 11, l. 16.) (風に触がある。)

この他の属性は、水・火と同様に地との共通の属性であるので、地で指摘されたスートラが根拠になっている。

<sup>21</sup>Cf. VS : *arūpiṣv acakṣuṣatvāt* | 4-1-13 (VSC : p. 34, l. 3) (色のない（実体）においては、眼に視られる性質がないから見られない。)

<sup>22</sup>Cf. VS : *tṛṇa-karma vāyu-samyogāt* | 5-1-14 (VSC : p. 39, l. 1) (草の運動は、風との結合によって（生じる。))

<sup>23</sup>潜勢力(*saṃskāra*)には、潜在印象 (*bhāvanā*)・ヴェーガ(勢い ; *vega*)・弾力 (*sthiti-sthāpaka*)の三種類があるが、チャンドラーナダの註釈によれば「ヴェーガを予定して、風と草との結合から草の運動が生じる」とあるので、この場合の潜勢力は、ヴェーガである。

Cf. Vṛ : *vega-apekṣād vāyu-tṛṇa-samyogāt tṛṇa-ādīnām karma* | (VSC: p. 39, l. 4)

<sup>24</sup>この風のみ4種類目の氣息を数える。これは、身体の内部と外部の区別からきている。

Cf. NK : *loke yogaśāstre ca viśaya-vāyor bhedena prasiddhasya prāṇa-ākhyasya svarūpam āha | prāṇo 'ntaḥ śarīra itī | antaḥ śarīre yo vāyur vartate sa prāṇa ity ucyate* | (PBh(1): p. 47, ll. 23~25 (世間でも、そして、『ヨーガ・シャーストラ』でも、対象としての風との区別によって、息と名づけられたもの本質が「身体の内部の息」と言われた。身体の内部にある風が、息といわれる。))

なお、この *yogaśāstra* は、『ヨーガ・スートラ』のことを指していると思われるが、『ヨーガ・スートラ』には風と息を区別している記述はない。

<sup>25</sup>マルト(*Marut*)は、『リグ・ヴェーダ』の暴風雨神群のことで、ふつうマルト神群 (*Marutaḥ*) と複数形で表される。風雨・電光・雷鳴を伴う暴風の現象を神格化したもので、通常は暴風雨神ルドラと牝牛プリシュニーとの間に生まれたとされるが、天上の大海から生まれたとも、風神ヴァーユの子供たちであるとも、ダルマ神の妻の一人マルトヴァティーの子であるとも言われる。その数は、33とも27とも11とも7ともいわれ不定である。菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂書店・1985年・314頁参照。

<sup>26</sup>Cf. VS : *vāyur iti mati sannikarṣe pratyakṣa-abhāvād dṛṣṭam liṅgam na vidyate* | 2-1-15 (VSC : p. 13, ll. 9~10) (接触した際、「風である」という知覚が、直接知覚されないから、(風には)可視の徴証はみられない。)

<sup>27</sup>Cf. *vāyor vāyu-saṃmūrccanaṃ nānātve liṅgam* | VS : 2-1-14 (VSC : p. 13, l. 5) (風と風の衝突は、(風の)多様性の徴証である。)

である。また、それ（風の多様性）は、草の動きによっても（推知される）<sup>28</sup>。

氣息は、身体の内側において、流動物・汚物・（身体の）要素の刺激等の原因で、1つであるが、結果の相違のために出息（apāna）等の諸名称<sup>29</sup>を持っている。

## (5)4元素による世界の創造と破壊

### ①破壊

<40>

[57] iha\_idānīm caturṇām mahābhūtānām sṛṣṭi-saṃhāra-vidhir ucyate |  
brāhmeṇa mānena varṣa-śtānte vartamānasya brahmaṇo ' pavarga-kāle  
saṃsāra-khinnānām sarva-prāṇinām niśi viśrāma-arthaṃ sakala-bhuvana-  
pater maheśvarasya saṃjihirṣā-samakālaṃ śarīra-indriya-mahābhūta-  
upanibandha-kānām sarva-ātma-gatānām adṛṣṭānām vṛtti-nirodhe sati  
maheśvara-icchā-ātma-aṇu-saṃyogaja-karmabhyaḥ śarīra-indriya-kāraṇa-  
aṇu-vibhāgebhyas tat-saṃyoga-nivṛttau teṣām āparamāṇv-anto vināśaḥ  
tathā pṛthivy-udaka-jvalana-pavanānām api mahābhūtānām anena\_eva  
krameṇa\_uttarasminn uttarasmin sati pūrvasya pūrvasya vināśaḥ tataḥ  
pravibhaktāḥ paramāṇavo ' vatiṣṭhante dharma-adharma-saṃskāra-  
anuviddhās ca\_ātmanas tāvantam eva kalam |

今ここで、4つの元素（mahābhūta）の創造と破壊の方法が説かれる。

ブラフマンの数え方による百年の終わりにおいて、（すなわち）現在のブラフマンが解脱する時、輪廻に苦しめられた全生物の夜の休息を目的として、全世界の主であるマヘーシュヴァラの破壊を望む意志（が生じる）。と同時に、身体と感覚器官と元素（mahābhūta）をつなぎとめていた全ての自我に含まれる不可見力の作用の破壊がある。同時に、マヘーシュバラの欲求と自我と原子（aṇu）の結合より生じた運動により、身体と感覚器官の原因である原子（aṇu）の分離があり、それによってこの結合が消滅する。その時、それらは、まさに最終の原子（paramāṇu）まで消滅する。このように、地・水・火・風の元素（mahābhūta）もまたこの順序

<sup>28</sup>Cf. VS : tṛṇa-karma vāyu-saṃyogāt | 5-1-14 (VSC : p. 33, l. 7) (草の運動は、風との結合によって（生じる。）

<sup>29</sup>普通、氣息（prāṇa）は、下気（apāna）遍在気（vyana）、上気（udāna）、氣息（prāṇa）等気（samā）の5種類が挙げられている。

Cf. NK : mūtra-puriṣayor adho nayanād apānaḥ rasasya garbha-nāḍī vitananāḍ vyanaḥ anna-pāna-āder ūrdhvaṃ nayanād udānaḥ mukha-nāsikābhyāṃ niṣkrāmaṇāt prāṇaḥ āhāreṣu pāka-arthaṃ udarasya vahneḥ samaṃ sarvatra nayanāt samāna iti | (PBh(1) : p. 48, ll. 3~5) (尿や排泄物を下に導くので、下気（apāna）である。液体で臓器と血管を伸ばすので、遍在気（vyana）である。食物や飲み物等を上方に導くので、上気（udāna）である。口と鼻から出てくるので、氣息（prāṇa）である。消化するものが入った時、胃腸の熱を全てに均等に導くので、等風（samā）である。)

また、この5種の氣息（prāṇa）は古ウパニシャッドにも出てきている。（Bṛhad.Up. 3-9-26 ; Chandogya-Up. 3-13 ; 5-19~23 ; Praśna-Up. 3-3~9 ; Maitri-Up. 2-6 ; 6-9 ; 6-33 ; 7-1）しかし、上記のNKの解説とは多少異なる。中村訳180~181頁参照。



によって、それぞれの後のものが存在する時に、それぞれの前のものが、消滅する。そして、分離した原子 (paramāṇu) が静止する。善・悪・潜勢力・に従属する諸自我が、まさにその時に (静止する)。

## ②創造

[58] tataḥ punaḥ prāṇinām bhoga-bhūṭaye maheśvara-siṣṭkṣa-anantaram sarva-ātma-gata-vṛtti-labdha-adṛṣṭa-apekṣebhyas tat-samyogebhyaḥ pavana-paramāṇuṣu karma-utpattau teṣām paraspara-samyogebhyo dvy-aṇuka-ādi-prakrameṇa mahān vāyuḥ samutpanno nabhasi dodhūyamānas tiṣṭhati | tad-anantaram tasminn eva vāyāv āpyebhyaḥ paramāṇubhyas tena\_eva krameṇa mahān salila-nidhir utpannaḥ poplūyamānas tiṣṭhati tad-anantaram tasminn eva jalanidhau pārthivebhyaḥ paramāṇubhyo mahā-prṭhivī saṃhatā ' vatiṣṭhate | tad-anantaram tasminn eva mahā-udadhau taijasebhyo ' ṇubhyo dvy-aṇuka-ādi-prakrameṇa\_utpanno mahāms tejorāsiḥ kenacid anabhibhūtatvād dedīpyamānas tiṣṭhati |

そして、次に諸生物の (苦・楽の) 享受が存在する時に、マヘーシュヴァラの創造しようという意志がある。

その次に、全ての自我の中にある活動を得た不可見力を待って、その結合により風の原子 (paramāṇu) において、運動が生じる。これら両方の結合から、2原子体 (dvi-aṇuka) 等といった順序によって、大きな風が生じる。(その風が、) 大気の中において、激しく揺れた状態にとどまる。

その次に、まさにその風において、水の原子 (paramāṇu) から、まさにこの順序で大きな水の塊が生じ、それがうねりながらとどまる。その次に、まさにその水の塊において、地の原子 (paramāṇu) から、大きな地が集まってとどまる。

その次に、まさにその大なる水の塊において、火の原子 (aṇu) から、2原子体 (dvi-aṇuka) 等といった順序によって、大なる火の塊が生じる。これは、どのようなものにも妨げられないので、強く光り輝いてとどまる。

[59] evaṃ samutpanneṣu caturṣu mahābhūteṣu maheśvarasya\_abhidhyāna-mātrāt taijasebhyo ' ṇubhyaḥ pārthiva-paramāṇu-sahitebhyo mahad aṇḍam ārabhyate tasmimś catur-vadana-kamalaṃ sarva-loka-pitāmahaṃ brahmāṇaṃ sakala-bhuvana-sahitam utpādyā prajā-sarge viniyunkte | sa ca maheśvareṇa viniyukto brahmā ' tīśaya-jñāna-vairāgya-iśvarya-sampannaḥ prāṇinām karma-vipākam viditvā karma-anurūpa-jñāna-bhoga-āyusaḥ sutān prajāpatīn mānasān manu-deva-rṣi-pitṛgaṇān mukha-bāhu-ūru-pādātāś caturo varṇan anyāni ca\_uccāvācāni bhūtāni ca<sup>30</sup> sṛṣṭvā āśaya-anurūpair dharma-jñāna-vairāgya-iśvaryaīḥ saṃyojayati\_iti ||

このように、4つの元素 (mahābhūta) が生起された時、マヘーシュヴァラの欲

<sup>30</sup>WPRにはないが、PBh(1)により補う。

このように、4つの元素 (mahābhūta) が生起された時、マヘーシュヴァラの欲求のみによって、火の原子 (aṇu) と地の原子 (paramāṇu) の結合したもものから、大なる卵が生じる。その中において、4つの蓮華の顔を持ち、全世界の祖であるブラフマンを、全世界とともに生じさせ、生物の創造を委託する。そして、そのマヘーシュヴァラによって委託されたブラフマンは、卓越した知恵・離欲・能力を備えており、諸生物のカルマンの (結果が) 熟しているのを知ってから、(その) カルマンにふさわしい知恵と享受と寿命を持った、(ブラフマンの) 息子であり、(ブラフマンの) 心より生じた、人間・神・聖仙・祖霊たちを (創造する。) (そして) 口・腕・もも・足から4つのヴァルナを、そして他の様々な生物たちを創造し、(そのそれぞれの) アーシュヤ<sup>31</sup>にふさわしい善・知恵・離欲・能力を付与する。

## (6) 虚空 (ākāśa)

<41>

[60] ākāśa-kāla-diśām ekaikatvād aparajāty-abhāve pāribhāṣikyas tisraḥ saṃjñā bhavanti | ākāśaḥ kālo dig iti | [61] tatra-ākāśasya guṇāḥ śabdasaṃkhyā-parimāṇa-prthaktva-samyoga-vibhāgāḥ | [62] śabdaḥ pratyakṣatve saty akāraṇa-guṇa-pūrvakatvād ayāvad-dravya-bhāvitvād āśrayād anyatra-upalabdheś ca na sparsavad-viśeṣa-guṇāḥ | bāhya-indriya-pratyakṣatvād ātmā-antara-grāhyatvād ātmany asamavāyād ahaṃkāreṇa vibhakta-grahaṇāc ca na ātmā-guṇāḥ | śrotra-grāhyatvād vaiśeṣika-guṇa-bhāvāc ca na dik-kāla-manasām pariśeṣād guṇo bhūtvā-ākāśasya-adhigame liṅgam | [63] śabda-liṅga-aviśeṣād ekatvaṃ siddham | tad-anuvidhānād eka-prthaktvam | vibhava-vacanāt paramahat parimāṇam | śabda-kāraṇatva-vacanāt samyoga-vibhāgav iti | [64] ato guṇavattvād anāśritatvāc ca dravyam | samāna-asamāna-jātiya-kāraṇa-abhāvāc ca nityam | [65] sarva-prāṇinām ca śabda-upalabdhou nimittaṃ śrotra-bhāvena | [66] śrotraṃ punaḥ śravaṇa-vivara-saṃjñako nabho-deśaḥ śabda-nimitta-upabhoga-prāpaka-dharma-adharma-upanibaddhaḥ tasya ca nityatve saty upanibandhaka-vaikalyād bādhiryam iti |

虚空・時間・方角は、それぞれが単一で下位の種類がないことにおいて、慣例的な3つの名称がある。虚空・時間・方角というように。

その中で、虚空の属性は、音・数・量・<別異性>・結合・分離である。

音は、(1) 直接知覚において存在し、原因の属性に基づいたものではないから、(2) 実体が存在する限り (存在するのでは) ないから、(3) 基体から別のところで知られるから、触覚を有する (実体の) 特殊な属性ではない。

また、(1) 外部の感覚器官で直接知覚されるから、(2) 他の自我に把握されるから、(3) 自我に内属しないから、(4) 自己意識からは区別して認識されるから、自我の属性ではない。

また、(1) 耳によって認識される属性であるから、(2) 特殊な属性であるから、方角、時間、意識の属性ではない。

<sup>31</sup>これは、NKによればkarmanの結果が熟したものであり、いわゆる業である。



したがって残余法により、（音は虚空の）属性であり、虚空の証明においての徴証である<sup>32</sup>。

音声の徴証において差異がないので、（虚空に）唯一性が成立する。それに付随することから、一別異性(eka-pr̥thaktva)が（虚空）にある。「遍在」<sup>33</sup>（と『スートラ』に）言われるので、（虚空は）最大の量である。「音の原因である」<sup>34</sup>（と『スートラ』に）言われるので、（虚空は）結合と分離を持つ。

したがって、属性を持つことと依存しないことから（虚空は）実体である。また、同種・異種といった原因がないので恒常である。また（虚空は）、全ての生物が音を知覚することにおいて、聴覚の存在により、（その音の知覚の）動力因である。

さらに、耳（=聴覚器官）は、耳孔と称する空間の場所であり、音によって生じた（快・不快の）受容を導く善や悪と結びつけられている。また、恒常とは言っても結びつけられるものの欠陥によって聾になる。

## (7)時間(kāla)

<42>

[67] kālaḥ para-apara-vyatikara-yaugapadya-ayaugapadya-cira-kṣipra-pratyaya-liṅgaḥ | teṣāṃ viṣayeṣu pūrva-pratyaya-vilakṣaṇānām utpattāv anyā-nimitta-abhāvād yad atra nimittaṃ sa kālaḥ | [68]sarva-kāryāṇāṃ ca utpatti-sthiti-vināśa-hetus tad-vyapadeśāt | kṣaṇa-lava-nimeṣa-kāṣṭhā-kalā-muhūrta-yāma-ahorātra-ardhamāsa-māsa-ṛtv-ayana-saṃvatsara-yuga-kalpa-manvantara-pralaya-mahāpralaya-vyavahāra-hetuḥ | [69]tasya guṇāḥ saṃkhyā-parimāṇa-pr̥thaktva-saṃyoga-vibhāgāḥ | [70]kāla-liṅga-aviśeṣād ekatvaṃ siddham | tad-anuvidhānāt pr̥thaktvam | kāraṇe kāla iti vacanāt parama-mahat parimāṇam | kāraṇa-paratva-ādi-vacanāt saṃyogaḥ | tad-vināśakatvād vibhāga iti | [71]tasya-ākāśavad dravyatva-nityatve siddhe | [72] kāla-liṅga-aviśeṣād añjasa-ekatve' pi sarva-kāryāṇāṃ ārambha-kriyā-abhinirvṛtti-sthiti-nirodha-upādhi-bhedān maṇivat pācakavad vā nānātva-upacāra iti ||

時間は、先・後・前後の混合（vyatikara）・同時・非同時・遅い・速いという観念を徴証（liṅga）とする。これら（の観念）には、対象において前の観念と異なる（観念）が発生するとき、他の動力因が存在しないから、この場合の動力因がこの時間である。また、全ての結果の発生・存続・消滅の原因である。なぜなら、これ（時間）が、それらのことを表示するからである。

（時間は）クシャナ（kṣaṇa：瞬間）・ラヴァ（lava：1秒のごく一部）・ニメーシャ（nimeṣa：まばたきする間）・カーシュター（kāṣṭhā：瞬時）・カラー（

<sup>32</sup>Cf. VS : liṅgam ākāśasya | 2-1-26 | (VSC : p. 15, l. 17) (このように、音は) 虚空の徴証である。)

<sup>33</sup>Cf. VS : vibhāvād mahān ākāśaḥ | 7-1-28 (VSC : p. 55, l. 17.) (遍在であるから、虚空は最大である。)

<sup>34</sup>Cf. VS : saṃyogād vibhāgāc chabdāc ca śabda-niṣpatteḥ | 2-2-36 (VSC : p. 23, l. 2.) (結合から、分離から、そして音が発生するから (音は結果である)。)

kalā : 16分の1秒) ・ムフルタ (muhūrta : 1日の30分の1) ・ヤーマ (yāma : 3時間) ・1日 (ahorātra) ・半月 (ardhamāsa) ・1カ月 (māsa) ・季節 (ṛtu) ・半年 (ayana) ・1年 (saṃvatsara) ・ユガ (yuga : 5~6年) ・カルパ (kalpa : 宇宙的時間) ・マヌの時間 (manvantara) ・(世界の) 終末 (pralaya) , (世界の) 大終末 (mahāpralaya) といった慣用的言語表現 (vyavahāra) の原因である。

この(時間の) 属性は、数・量・<別異性> (pṛaktva) ・結合・分離である。時間の徴証は区別がないから、単一性 (ekatva) が成立する。(同様に) これに付随することから、<別異性>が成立する。また「原因において時間が」<sup>35</sup> (と『スートラ』に) 説かれているので、最大の量が成立する。「先にあること (paratva) <sup>36</sup>等を原因」<sup>37</sup>と (『スートラ』に) 説かれるので、結合が成立する。それを消滅させるので、分離もまた成立する。それ(時間) は、空間のように恒常性と<実体性> (dravyatva) が成立する。

時間の徴証は、(どれも) 区別がないので、直ちに単一性(が成立する) ことにおいてさえも、全ての結果の開始 (ārambha) ・実行 (kṛyā) ・成立 (abhinirvṛtti) ・存続 (sthiti) ・消滅 (nirodha) といった条件の相違から<sup>38</sup>、「宝石のように」・「料理人のように」というような様々な比喩<sup>39</sup>が存在する。

<sup>35</sup>Cf. VS : kāraṇena kāla iti | 7-1-32 (VSC : p. 56, l. 1.) (原因が(全てのところにある) ことから、時間は遍在と言われる。)

<sup>36</sup>paratvaとaparatvaは、時間と空間に共通の属性であり、空間では「遠さ」という意味になる。

<sup>37</sup>Cf. VS : kāraṇa-paratvāt kāraṇa-aparatvāc ca | 7-2-26 (VSC : p. 61, l. 1) (原因のかなた性から、そして原因のこなた性から(遠い、近いと言われる。))

<sup>38</sup>NKによれば、この表現は、かなた・こなたといった差異の観念には違いがないので、唯一であるとする。

Cf. NK : yady ekaḥ kālaḥ kathaṃ tatra aneka-vyapadeśa ity āha | kāla-liṅga-aviśeṣād iti | kāla-liṅgāṇāṃ para-apara-ādi-pratyayānāṃ aviśeṣād bheda-apratipādakatvād añjasā mukhyayā vṛtṭyā kālasya ekatve 'pi siddhe nānātva-upacārān nānātva-vyapadeśaḥ | (PBh(1) : p. 66, ll.8~11) (問。時間が一つならば、何故このように多くの表現が言われるのか。答。時間の徴証に差異が無いからである。時間の徴証である「かなた」「かなた」等の観念に差異が無いので、区別を教示することが無いので、真実の主たる行為としては時間の唯一性は証明されているが、慣用的な多様性のために、多様な表現をするのである。)

<sup>39</sup>NKによれば、多くの表現は、条件の違いによって成立するとする。

Cf. NK: sarveṣāṃ kāryāṇāṃ ārambha upakramaḥ kriyāyā abhinirvṛtṭiḥ kriyāyāḥ parisamāptiḥ sthitiḥ svarūpāvasthānam nirodho vināśa eṣāṃ upādhiṇāṃ bhedaṇ nānātva-vyapadeśa yathā\_eko maṇiḥ sphaṭika-ādir nila-ādy-upādhi-bhedān nila iti pīta iti vyapadiśyate tathā kālo' pyeka eva\_upādhi-bhedād ārambha-kāla iti kriyā-sthiti-kāla iti nirodha-kāla iti vyapadiśyate ity arthaḥ | maṇer upādhi-sambandho na vāstvaḥ kālasya tu kriyā-sambandho vāstava iti pratipādayitum dṛṣṭa-anta-antaram āha | pācaka\_iti | yathā\_ekasya puruṣasya pacana-ādi-kriyā-yogāt pācaka iti pāṭhaka iti vyapadeśas tathā kālasya\_āpi na tu prārambha-ādi-kriyā\_eva kālo vilakṣaṇa-buddhi-vedyatvād iti || (PBh(1). p.66, ll. 11~19) (全ての結果の(発生の) 開始すなわち近づくこと、存続すなわち本質の安定、破壊すなわち消滅、これらの条件の区別により、様々な表現がされる。例えば、水晶などの一つの宝石が、青などの条件の区別によって、青・黄と表現されるように、時間もまた、まさに条件の区別から、開始の時間、行為の経験の時間、消滅の時間、と表現されるという意味である。宝石と条件の結合は真実のものではなく、しかし、時間と行為の結合は真実のものである、と説明するために最後に他の例を言う。料理人と。例えば、一人の人間と煮る等の行為との結合から、料理人である、学習者である、と表現される。時間も同様である。しかし、開始などの行為は、異質な知識が知られるので、時間ではない。)

## (8)方角(diś)

<43>

[73]dik pūrva-apara-ādi-pratyaya-liṅgā | mūrta-dravyam avadhiṃ kṛtvā  
mūrteṣv eva dravyeṣv etasmād idaṃ pūrveṇa dakṣiṇeṇa paścimena-  
uttareṇa pūrva-dakṣiṇeṇa dakṣiṇa-apareṇa-apara-uttareṇa-uttara-pūrveṇa  
ca adhastād upariṣṭāc ca iti daśa pratyayā yato bhavanti sā dig iti | anya-  
nimitta-asambhavāt | [74] tasyās tu guṇāḥ saṃkhā-parimāṇa-prthaktva-  
saṃyoga-vibhāgāḥ kālavad ete siddhāḥ | [75] dig-liṅga-aviśeṣād añjasā-  
ekatve ' pi diśaḥ parama-maharṣibhiḥ śruti-smṛti-loka-saṃvyavahāra-  
artham meruṃ pradakṣiṇam āvartamānasya bhagavataḥ savitur ye  
saṃyoga-viśeṣā loka-pāla-parigrhīta-dik-pradeśānām anvarthāḥ prācyādi-  
bhedena daśa-vidhāḥ saṃjñāḥ kṛtāḥ ato bhaktyā daśa diśaḥ siddhāḥ |  
tāsām eva devatā-parigrahāt punar daśa saṃjñā bhavanti | mähendri  
vaiśvānarī yāmyā nairṛtī vāruṇī vāyavyā kauverī aiśānī brāhmī nāgī ca iti  
||

方角は、東・西などの観念を徴証とする。有形の実体の限定を作り、まさに有形であるような実体においてのみ、「これは、あれよりも(1) 東にある」。(2) 「南にある」、(3) 「西にある」、(4) 「北にある」、(5) 「東南にある」、(6) 「南西にある」、(7) 「西北にある」、(8) 「北東にある」、(9) 「上にある」、(10) 「下にある」という10種の観念を生じさせるものが、方角なのである。なぜなら、他の動力因が存在しないからである。

ところで、これ(方角)の属性は、数・量・別異性・結合・分離であり、時間と同様に証明済みである。

方角の徴証は特殊ではないので、(方角には)真実には唯一性がある。しかし、方角は、最上級の大聖者によって、天啓聖典(śruti)・聖伝(smṛti)・世俗の言語慣用のために、メール山を右に回っている尊き太陽神との特殊な結合や世界の守護者に守られた方角や場所の適切な(名称)、及び東等の区別によって、十種の名称が作られている。したがって、二次的な意味で十種類の方角が確立されたのである。まさに、それらを神格が守るので、さらに十種類の名称がある。(すなわち)(1)マヘンドリー(東)、(2)ヴァイシュヴァーナリー(東南)、(3)ヤームヤー(南)、(4)ナイルリイティー(南西)、(5)ヴァルーニー(西)、(6)ヴァーヤヴィヤー(西北)、(7)カウヴェリー(北)、(8)アイシャーニー(北東)、(9)ブラフミー(上方)、(10)ナーギー(下方)である。

## (9)自我(ātman)

<44>

[76] ātmatva-abhisambandhād ātmā | tasya saukṣmyād apratyakṣatve sati  
karaṇaiḥ śabda-ādy-upalabdhy-anumitaiḥ śrotra-ādibhiḥ samadhigamaḥ  
kriyate | vāsy-ādinām karaṇānām kartṛ-prayojyatva-darśanāt śabda-ādiṣu



prasiddhyā ca prasādhako ' numīyate | [77] na śarīra-indriya-manasām  
 ajñatvāt | na śarīrasya caitanyam ghaṭa-ādi-vad bhūta-kāryatvān mṛte  
 ca\_asambhavāt | na\_indriyāṇām karaṇatvād upahateṣu viṣaya-asānnidhye  
 ca\_anusmṛti-darśanāt | na\_āpi manasaḥ karaṇa-antara-anapekṣitve  
 yugapad ālocana-smṛti-prasaṅgāt svayaṃ karaṇa-bhāvāc ca | pariśeṣād  
 ātma-kāryatvāt tena ātmā samadhigamyate | [78] śarīra-samavāyinībhyām  
 ca hita-ahita-prāpti-parihāra-yogyābhyām pravṛtti-nivṛttibhyām ratha-  
 karmaṇā sārathivat prayatnavān vigrahasya-adhiṣṭhātā ` numīyate prāṇa-  
 ādibhiś ca\_iti | katham śarīra-parigrhīte vāyau vikṛta-karma-darśanād  
 bhastrā-dhmāpayitā\_eva nimeṣa-unmeṣa-karmaṇā niyatena dāruyantra-  
 prayoktā\_eva dehasya vṛddhi-kṣata-bhagna-saṃrohaṇa-ādi-nimittatvād  
 gr̥hapatir\_eva abhimata-viṣaya-gr̥haka-karaṇa-sambandha-nimittena  
 manaḥ-karmaṇā gr̥ha-koṣeṣu pelaka-preraka\_eva dārakaḥ nayana-viṣaya-  
 ālocana-anataram rasa-anusmṛti-krameṇa rasa-navikriyā-darśanād aneka-  
 gavākṣa-antar-gata-prekṣakavad ubhaya-darśi kaścid eko vijñāyate | [79]  
 sukha-duḥkha-icchā-dveṣa-prayatnaiś ca guṇair guṇy anumīyate te ca na  
 śarīra-indriya-guṇāḥ kasmāt ahaṃ-kāreṇa\_eka-vākyatā-bhāvāt pradeśa-  
 vṛttivād ayāvad-dravya-bhāvitvād bhāya-indriya-apratyakṣatvāc ca | tathā  
 ' haṃ-śabdena\_āpi pṛthivy-ādi-śabda-vyatirekāc\_iti | [80] taya guṇāḥ  
 buddhi-sukha-duḥkha-icchā-dveṣa-prayatna-dharma-adharma-saṃskāra-  
 saṃkhyā-parimāṇa-pṛthaktva-saṃyoga-vibhāgāḥ | ātma-līnga-adhikāre  
 buddhy-ādayaḥ prayatna-antāḥ siddhāḥ | dharma-adharmāv ātma-antara-  
 guṇānām akāraṇatva-vacanāt | saṃskāraḥ smṛty-utpattau kāraṇa-vacanāt  
 | vyavasthā-vacanāt saṃkhyā pṛthaktvam apy\_āta\_eva\_tathā\_ca\_ātma\_iti  
 vacanāt paramamahat parimāṇam | sannikarṣa-jatvāt sukha-ādinām  
 saṃyogaḥ | tad-vināśakatvād vibhāga\_iti |

<自我性 (ātmatva) >と結合するので、自我である。それは、微妙 (saukṣmya)  
 ) であるので直接知覚されず、耳などの感覚器官による音声などの知覚から、推論  
 されることによって、(自我の) 了解がなされる。

斧などの道具が、行為者に使用されることが見られることから、また、音声など  
 においても(同様の関係が) 成立することによって、<依存するもの (
 prasādhaka)>が推知される。

(その<依存するもの>は) 身体と感覚器官ではない。なぜなら、それらは知る  
 ことが出来ないから。身体は、精神 (caitanya) ではない。なぜなら、(身体は)  
 瓶のごとく元素の結果であるから。また、死体においては(精神は) 存在しないか  
 ら。さらに、諸感覚器官も(精神では) ない。なぜなら、それは道具であるから。  
 また、感覚器官が損なわれたときも、あるいはその感覚器官の対象が近くに無いと  
 きも、その対象の追想が見られるから。また、意識 (manas) も(精神) ではない。  
 なぜなら、他の感覚器官から独立して、(断続して) 知覚と記憶が成立するという  
 事態が起こるから。また、意識自身が感覚器官であるから。

したがって、残余法により、(精神は) 自我の結果であることが(証明されるか  
 ら)、これにより自我が(精神であることが) 証明された。

身体に内属した、利益の獲得と不利益の除去に適した、行動や行動の停止によって、活動し分離する支配者（である自我の存在）が推知される。まさに車の運動によって、御者の存在が知りうるように。

また、呼吸等によっても（推知される。）どのようにしてか。身体に所持された風において、変化した運動を見られるので、まさに袋に息を吹き込む人（を知りうる）ように、（自我の存在が推知される。）

眼の一定の開閉運動によって、まさに木製人形の操り主（を知りうる）ように、（自我の存在が推知される。）

（自我は）身体の成長や傷・骨折の治癒等の動力因であることから、まさに家主（を知りうる）ように、（自我の存在が推知される。）

希望する対象と、それを把握する感覚器官との結合の動力因である意識の運動により、まさに家の隅でボールを転がす少年のような（自我の存在が推知される。）

対象を見ることに続いて、味を思い出すという順序で、味の変化が見られるため、二つの窓の内側にいる（同一）観客のような、両者を見る唯一の何者かが認識される。

楽・苦・欲求・嫌悪・意志的努力という諸属性によって、属性を持つものが推知される。そして、それらは身体と感覚器官の属性ではない。なぜなら、それら（の属性）は、「私」という観念によって、同一の文に存在するから。（身体の）部分に生起するから。実体がある限り存在するのではないから。外部の感覚器官に直接知覚されないから。

また、同様に「私」という言葉によっても、（自我の存在が推知される。）なぜなら、（「私」という言葉は）「地」と言う言葉とは区別されるから。

この（自我の）属性は、知識・楽・苦・憎悪・意志的努力・善・悪・潜勢力・数量・別異性・結合・分離である。

自我の徴証の章において、知識から意志的努力までは証明されている<sup>40</sup>。

善と悪は、「他の自我の属性は、原因とならない。」と言う言葉によって証明されている<sup>41</sup>。

潜勢力は、「記憶が生じるときの原因」と言う言葉によって証明されている<sup>42</sup>。

「それぞれの区別」という語によって、数が証明されている。別異性も、同じ言葉で証明されている<sup>43</sup>。

また、「自我も同様である」という語によって、最大の量（が証明されている。）<sup>44</sup>

楽などが接近によって生じるので、結合がある。それを消滅させるので、分離が

<sup>40</sup>Cf. VS : prāṇa-apāṇa-nimeṣa-unmeṣa-jivana-mano-gati-indriya-antara-vikārāḥ sukha-duḥkhe icchā-dveṣau prayatnaś ca\_ity ātma-liṅgāni | 3-2-4 (VSC : p. 28, ll. 13~14) (呼吸・眼の開閉・生命と意識（マナス）の活動・他の感覚器官の変化、楽と苦、欲求と嫌悪、そして意志的努力は、自我の徴証である。)

<sup>41</sup> Cf. VS : ātma-guṇeṣv ātma-antara-guṇānām akāraṇatvāt | 6-1-7 (VSC : p.46, l. 8) (自我の諸属性に対して、他の自我の諸属性は、原因とはならないことから、（自らの行為が善・悪の原因となる）。

チャンドラナーンダ本によって『スートラ』を素直に訳すところなるが、ブラシャスタパーダは善・悪の内属因としての自我の方を論証したいようである。もちろん、ブラシャスタパーダのこの解釈は全く無理のないものである。

<sup>42</sup> Cf. VS : ātma-manasoḥ samyoga-viśeṣāt saṃskārāc ca smṛti | 9-22 (VSC : p. 78, l. 11) (自我と意識の特殊な結合から、また、潜勢力から、記憶が生じる。)

<sup>43</sup>Cf. VS : nānā vyavasthātaḥ | 3-2-16 (VSC : p. 31, 11) (それぞれの（自我の）区別がある。)

<sup>44</sup> Cf. VS : vibhāvād mahān ākāśaḥ | 7-1-28 (VSC : p. 55, l. 17) (遍在するので、虚空は大である。)

VS : tathā ca\_ātmā | 7-1-29 | (VSC : p. 55, l. 19) (自我も同様である。)



ある。

## (10)意識(manasa)

<45>

[81] manastva-yogān manaḥ | saty apy ātma-indriya-ārtha-sānnidhye  
jñāna-sukha-ādinām abhūtvā-utpatti-darśanāt karaṇa-antaram anumīyate  
| śrotra-ādy-avyāpāre smṛty-utpatti-darśanād bāhya-indriyair agrhīta-  
sukha-ādi-grāhya-antara-bhāvāc ca\_antaḥ-karaṇam | [82] tasya guṇaḥ  
saṃkhyā-parimāṇa-prthaktva-saṃyoga-vibhāga-paratva-āparatva-  
saṃskārāḥ | prayatna-jñāna-ayaugapadya-vacanāt prati-śarīram ekatvaṃ  
siddham | prthaktvam apy ata eva | tad-abhāva-vacanād aṇu-parimāṇam  
| apasarpaṇa-upasarpaṇa-vacanāt saṃyoga-vibhāgau | mūrtatvāt paratva-  
āparatve saṃskāraś ca | asparśavattvād dravya-ana-ārambhakatvam |  
kriyāvattvān mūrtatvam | sādharmaṇa-vigrahavattva-prasaṅgād ajñatvam |  
karaṇa-bhāvāt parārtham | guṇavattvād dravyam | prayatna-adṛṣṭa-  
parigraha-vaśād āśu-saṃcāri ca\_iti |  
iti Praśastapādabhāṣye dravya-padārthaḥ ||

<意識性>と結びつくから、意識である。

自我と感覚器官と（その）対象が近接して存在していても、知や楽などが発生しない事態が起こることが見られるので、（それを成立させるために必要な）他の器官が推知される。耳などが機能していない時に、記憶が生じることが見られるので（意識の存在が推知される。）また、外部の諸器官によっては把握されない、楽などの別種の把握されるものが存在するので、内部の器官が存在する。

それ（意識）の属性は、数・量・別異性・結合・分離・かなた・こなた・潜勢力である。

「意志的努力と知が同時に（起こらない。）」<sup>45</sup>という（『スートラ』の）言葉があるので、身体ごとに一つずつであることが証明されている。同様に、別異性もそうである。「それが存在しない」<sup>46</sup>という（『スートラ』の）言葉があるから、微妙なことが（証明されている。）「退出と進入」<sup>47</sup>という（『スートラ』の）言葉があるから、結合と分離が（証明されている。）

運動性を有するので、有形性がある。共通の身体をもつという過ち（が成立するため）に、（意識は）無知である。器官であることから、他のためのものである。属性を持つから、実体である。意志的努力と不可見力を含む力の故に、速く走る。

以上が、『プラシャスタパーダ・バーシュヤ』の実体というカテゴリー（

<sup>45</sup> Cf. VS : prayatna-ayaugapadyā-jñāna-ayaugapadyāc ca\_ekam manaḥ |3-2-3| (VSC : p. 28, l.10) (意志的努力が同時に起こらないから、そして知識も同時に起こらないから、意識 (manas) は一つである。)

<sup>46</sup> Cf. VS : tad-abhāvād aṇu manaḥ | 7-1-30| (VSC : p. 55, l. 21) (それが存在しないので、意識 (manas) は微小である。)

<sup>47</sup> Cf. VS : apasarpaṇam upasarpaṇam asīta-pīta-saṃyogaḥ kārya-antara-saṃyogāś ca\_ity adṛṣṭa-kāritāni | 5-2-19 (VSC : p. 43, ll. 5~6) ((意識の身体からの) 退出、(他の身体への) 接近、飲食物の結合および、他の結果との結合は、不可見力が生じさせたものである。)

padārtha) である。

## 第2部 知識の章(buddhi-prakarana)

### 1 知識の種類

<91> [211] buddhīr upalabdhir jānanaṁ pratyaya itī paryāyāb ॥

<92> [212] sā ca aneka-prakārā rthā-anantvāt praty-artha-niyatatrāe ca ।

<93> tasyāb soty apy aneka-viśvātra saucāsato dve vidhe vidyā ca avidyā  
ca ।iti । [213] tatra avidyā tatur-vidhā saṁsaya-viparyaya-anadhya-vasāhya-  
svapna-lakṣaṇā ॥

知識 (buddhi) と把握 (upalabdhī) と智覚 (jānana) と観念 (pratyaya) は、同義語である。

そして、これは対象が無数であり、また (その) 対象ごとに規定されているので、多くの種類がある。

・多種であるとは言え、まとめればこれは2種であり、知識と非知識である。この中で、非知識は、疑惑・誤解・非決定・夢を特徴とする。

### 2 非知識(avidyā)

#### (1) 疑惑(samsāya)

<94>

[214] saṁsāyas tāvat prasiddha aneka-viśeṣayoh cādrśya-mātra-darśanād  
ubhaya-viśeṣa-anusmaranād adbharmāc ca kṛpā avid ity ubhaya-avalambī  
vitarśāb saṁsāyāb ॥[215] sā ca dvi-vidhāḥ antar bahis ca । [216] antaḥ  
tāvat ādesikasya samyāḥ mūḥyā coddhāya punar ādesataḥ triṣu kuleṣu  
saṁsāyo bhavati kṛpā nu samyāḥ mūḥyā vā ।iti ॥[217] bahir dvi-vidhāḥ  
pratyakṣa-viśaye cā apratyakṣa-viśaye ca । [218] tatra apratyakṣa-aviśaye  
tāvat sādharāṇa-linga-darśanād ubhaya-viśeṣa-anusmaranād adbharmāc ca  
saṁsāyo bhavati । yathā ' jayāṇaḥ viśeṣa-mātra-darśanād gaṇa gavayo  
vā ।iti । [219] pratyakṣa-viśaye ' pi sthāṇa-puruṣayor ūcchvātā mātra-  
cādrśya-darśanād vakra-ādi-viśeṣa-anupalabdhitāb sthāṇa-v-ādi-  
ānūḥyā-viśeṣa-anabhivyaktāv ubhaya-viśeṣa-anusmaranād ubhaya-  
akṣyamāṇasya ātmanāb pratyayo bhāvayati kṛpā nu khalv āyay sthāṇāb

## 第2部 知識の章(buddhi-prakarāṇa)

### 1 知識の種類

<91> [211] buddhir upalabdhir jñānaṃ pratyaya iti paryāyāḥ ||

<92> [212] sā ca\_ aneka-prakārā' rtha-anantyāt praty-artha-niyatatvāc ca |  
|<93> tasyāḥ saty apy aneka-vidhatve samāsato dve vidhe vidyā ca\_ avidyā  
ca\_ iti | [213] tatra\_ avidyā catur-vidhā saṃśaya-viparyaya-anadhyavasāya-  
svapna-lakṣṇā ||

知識 (buddhi) と把握 (upalabdhī) と智慧 (jñāna) と観念 (pratyaya) は、同義語である。

そして、これは対象が無限であり、また (その) 対象ごとに規定されているので、多くの種類がある。

多種であるとは言え、まとめればこれは2種であり、知識と非知識である。この中で、非知識は、疑惑・誤解・非決定・夢を特徴とする。

### 2 非知識(avidyā)

#### (1) 疑惑(saṃśaya)

<94>

[214] saṃśayas tāvat prasiddha-aneka-viśeṣayoḥ sādṛśya-mātra-darśanād ubhaya-viśeṣa-anusmaraṇād adharmāc ca kiṃ svid ity ubhaya-avalambī vimarśaḥ saṃśayaḥ | [215] sa ca dvi-vidhaḥ antar bahiś ca | [216] antas tāvad ādeśikasya samyañ mithyā coddīśya punar ādisatas triṣu kāleṣu saṃśayo bhavati kiṃ nu samyañ mithyā vā\_ iti | [217] bahir dvi-vidhaḥ pratyakṣa-viśaye ca\_ apratyakṣa-viśaye ca | [218] tatra\_ apratyakṣa-aviśaye tāvat sādḥāraṇa-liṅga-darśanād ubhaya-viśeṣa-anusmaraṇād adharmāc ca saṃśayo bhavati | yathā ' ṭavyāṃ viśāṇa-mātra-darśanād gaur gavayo vā\_ iti | [219] pratyakṣa-viśaye ' pi sthāṇu-puruṣayor ūrdhvatā-mātra-sādṛśya-darśanād vakra-ādi-viśeṣa-anupalabdhitaḥ sthāṇutva-ādi-sāmānya-viśeṣa-anabhivyaktāv ubhaya-viśeṣa-anusmaraṇād ubhayatra-ākṛṣyamāṇasya\_ ātmanaḥ pratyayo dolāyate kiṃ nu khalv ayaṃ sthāṇuḥ

まず、疑惑とは、一般的な多くの特性を持つ2つのものがあるとき、(1) (それらの) 共通性だけを見るために、(2)また両者の特性を想起するために、(3)あるいは悪(adharma)のために、「何であろうか」という型式でおこる両者に関する思考(vimarṣa)が生じる。これが、疑惑である。

また、この(疑惑)は、(1)外的なもの(2)内的なもの2種類である。

まず、(1)内的(疑惑)は、(例えば) 占星術師(ādeśika)が、正しい予言と誤った予言をした後で、三つの時間(過去・現在・未来)についてのことがらを、現在さらに予言しようとする時、「果たして(予言は)的中するだろうか、的中しないであろうか」という疑惑が生ずる、というようなものである。

(2)外的疑惑は、二種類であり、(a)直接知覚の対象においてのものと、(b)直接知覚の対象においてのものではないものである。

その中で、(b)直接知覚の対象においてでないものは、ただ共通の徴証を見ることから、両者の差異を追想することから、悪(adharma)から、疑惑が生じる、というようなものである。例えば、森において、角だけを見たことにより、「牛か水牛か」というようなものである。

また、(a)直接知覚の対象においての(疑惑)は、(例えば以下のようなものである。) 杭と人間において、高さのみの像を見ることから、(杭の) 屈曲等の特殊性を把握しないので、<杭性(sthāṇutva)>等の特殊な普遍<sup>48</sup>が出現しない。この時、(人と杭の) 両方の特殊の追想から、(人と杭の) 両方のものに引かれている自我の観念が揺らぐ。「これは、杭であろうか、あるいは人間であろうか。」というように。

## (2)誤解(viparyaya)

<95>

[220] viparyayo ' pi pratyakṣa-anumāna-viśaya eva bhavati | [221] pratyakṣa-viśaye tāvat prasiddha-aneka-viśeṣayoḥ pitta-kapha-anilapahata-indriyasya ayathārtha-ālocanād asannihita-viśaya-jñānajasamskāra-apekṣād ātma-manasoḥ saṃyogād adharmāc ca atasmimś tad iti pratyayo viparyayaḥ | yathā gavya eva aśva iti | [222] asaty api pratyakṣe pratyakṣa-abhimāno bhavati yathā vyapagata-ghana-pañalam acalajalanidhi-sadṛśam ambaram añjana-cūrṇa-puñjaśyāmaṃ śārvaraṃ tama iti | anumāna-viśaye ' pi bāṣpa-ādibhir dhūma-abhimatair vahny-anumānaṃ gavya-viśāṇa-darśanāc ca gaur iti | trayī-darśana-viparīteṣu śākya-ādīdarśaneṣv idam śreya iti mithyā-pratyayaḥ viparyayaḥ śarīra-indriya-maṇṣv ātma-abhimānaḥ kṛtakeṣu nityatva-darśanaṃ kāraṇa-vaikalye kārya-utpatti-jñānaṃ hitam upadiśatsv ahitam iti jñānam ahitam

<sup>48</sup>このsmāmānya-viśeṣaは、最上の普遍(para-sāmānya)である存在性(sattā)と区別された、限定された普遍であり、包括と排除の両方の機能がある中間的な概念である。



誤解もまた、直接知覚と推論の対象においてのみ生じる。

まず、直接知覚において（の誤解）は、多くの特徴が見られる二者において、胆汁（pitta）・痰（kapha）・風（anila）<sup>49</sup>に損なわれた感覚器官が、不正な知覚をすることから、近接していない対象の知から生じた潜勢力（=潜在印象）を待つ<sup>50</sup>、自我と意識の結合から、また悪（adharma）から、そのものでないものにおいて、観念が（生じる。）これが、誤解である<sup>51</sup>。例えば、牛において馬の観念が（生じる）というように。

また、直接知覚がないときにおいても、直接知覚の誤謬（pratyakṣa-abhimāna）がある。例えば、厚い雲が消え去った後、空を不動の大海とみるように。または、目に塗る黒い粉末<sup>52</sup>を夜の闇とみるように。

また、推論の対象においてのものは、水蒸気を煙と誤解することによって、火を推論したり、水牛の角を見ることから、牛を（推論する）ようなものである。

（他に）ヴェーダ聖典の見解（trayī-darśana）に対立する釈迦たちの見解（=仏教徒の説；śākya-ādi-darśana）においての、「これ（仏教の説）が、優れている」という不正な観念が、誤解である。

さらに、身体・感覚器官・意識において、自我の誤謬（ātma-abhimāna）がある。

（この他に、）「造られたものにおいて、恒常性がある」という見解、「原因がなくとも、結果が発生する」という知識や、利益を教示するときに（それが）不利益だとする知識、（逆に）不利益を教示するときに（それを）利益とする知識がある。（これらは、全て誤解である。）

### (3)非決定(andyavasāya)

<96>

[223] anadhyavasāyo' pi pratyakṣa-anumāna-viśaya eva samjāyate । [224] tatra pratyakṣa-viśaye tāvat prasiddha-artheṣv aprasiddha-artheṣu vā vyāsaṅgād arthitvād vā kim ity ālocana-mātram anadhyavasāyaḥ । yathā vāhikasya panasa-ādiṣv anadhyavasāyo bhavati । tatra sattā-dravyatva-prṭhivī-tva-vṛkṣatva-rūpavattva-ādi-śākhā-ādhyapekṣo ' dhyavasāyo bhavati । panasatvam api panaseṣv anuvṛttam āmra-ādibhyo vyāvṛttam pratyakṣam eva kevalam tu upadeśa-abhāvād viśeṣa-samjñā-pratipattir

<sup>49</sup>この胆汁（pitta）・痰（kapha）・風（anila）とは、3種類の体液である。

<sup>50</sup>Vyによれば、この「潜勢力を待つ」とは潜勢力を原因とした記憶が誤解の原因となるということである。

Cf. Vy : saṃskāra-kāryatvāt smṛtiḥ saṃskāra-padena vivakṣitā । (Vy(1) : Vol. 2, p. 122, l. 14)

<sup>51</sup>この場合の非内属因も、自我と意識の結合であり、動力因が悪（adharma）である。

Cf. Vy : tasmād asamavāyi-karaṇād adharma ca viparyayaḥ । (Vy(1) : Vol. 2, p. 122, ll. 15~16) (この（自我と意識の結合という）非内属因から、そして（動力因である）悪から疑惑が生じる。)

<sup>52</sup>これは、現代的に言えばアイシャドーの一種である。



na bhavati | [225] anumāna-*viṣaye* ' pi nārikela-dvīpa-vāsinaḥ sāsna-  
mātra-darśanāt ko nu khalv ayaṃ prāṇī syād ity anadhyavasāyo bhavati  
||

非決定も、また直接知覚と推論の対象のみに生じる。

その中で、直接知覚の対象においては、よく知られた対象または知られていない対象において、気を散らすこと (*vyāsṅga*) あるいは (知りたいという) 欲求から、「何」と眺めるだけが、非決定である。例えば、パンの樹において、(それを知らない) ヴァーヒーカ人<sup>53</sup>に非決定があるようなものである。そこでは、有性、実体性、地性、樹性、有色性等や、枝などを待つ、決定 (の知識) がある。パンの樹性や、パンの樹に随順するマンゴー等の排除の直接知覚もある。しかし、ただ (その名称の) 教示がないだけのために、(パンの樹という) 特殊な名称の理解がないのである。

また、推論の対象においては、ナーリケーラ島<sup>54</sup>に住む人が、牛の咽の垂れ肉のみを見ることから、「これはどんな生物であろうか」という非決定がある。

#### (4) 夢 (*svapna*)

<97>

[226] uparata-indriya-grāmasya pralīna-manaskasya indriya-dvāreṇa eva yad anubhavanam mānasam tat svapna-jñānam | [227] katham | yadā buddhi-pūrvād ātmanaḥ śarīra-vyāpārād ahani khinnānām prāṇinām niśi viśrama-artham āhara-pariṇāma-artham vā ' dr̥ṣṭa-kārita-prayatna-apekṣād ātma-antaḥkaraṇa-sambandhān manasi kriyā-prabandhād antar-hṛdaye nirindrya ātma-pradeśe niścalaṃ manas tiṣṭhati tadā pralīna-manaska ity ākhyāyate pralīne ca tasminn uparata-indriya-grāmo bhavati tasyām avasthāyām prabandhena prāṇa-apāna-santāna-pravṛttāv ātmanaḥ-samyoga-viśeṣāt svāpākhyāt saṃskārāc ca indriya-dvāreṇa eva asatsu viṣayeṣu pratyakṣa-ākāraṃ svapna-jñānam utpadyate | [228] tat tu tri-vidham | saṃskāra-pāṭavād dhātu-doṣād adṛṣāc ca | [229] tatra saṃskāra-pāṭvāt tāvat kāmī kruddho vā yadā yam artham ādṛtaś cintayan svapiti tadā sā eva cintā-santatiḥ pratyakṣa-ākārā saṃjāyate | [230] dhātu-doṣād vāta-prakṛtis tad-dūṣito vā " kāśa-gamana-ādīn paśyati | pitta-prakṛtiḥ pitta-dūṣito vā ' gni-praveṣa-kanaka-parvata-ādīn paśyati | śleṣma-prakṛtiḥ śleṣma-dūṣito vā sarit-samudra-pratarāṇa-hima-parvata-ādīn paśyati | [231] yat svayam anubhūteṣv ananubhūteṣu vā prasiddha-arthaṣv aprasiddha-artheṣu vā yac chubha-āvedakaṃ gaja-ārohaṇac-chattra-lābha-ādi tat sarvaṃ saṃskāra-dharmābhyām bhavati

<sup>53</sup>NKによれば、このヴァーヒーカ人の住んでいる土地には、パンの木が生息していないとする。

<sup>54</sup>NKによれば、このナーリケーラ島牛が住んでいない島である。

viparītaṃ ca taila-abhyañjana-kharoṣṭra-arohaṇa-ādi tat sarvam adharma-  
saṃskārābhyāṃ bhavati | atyantā-prasiddha-artheṣv adr̥ṣṭād eva\_iti |  
[232] svapna-antikam yady apy uparata-indriya-grāmasya bhavati  
tathā\_apy atītasya jñāna-prabandhasya pratyavekṣaṇāt smr̥tir eva\_iti  
bhavaty eṣā catur-vidhā ' vidyā\_iti | |

感覚器官の集合体が静まり、意識 (manas) が消えた状態の人が、まさに感覚器官において (得る) 意識 (manas) の経験、それが夢の知識である。

どのようにしてか。(1)昼間の意識に基づいた自己の身体の運動のために疲れた人が、夜に休息することを目的として、または食物の消化を目的として、不可見力から生じた意志的努力の確認のために、自我と内官 (=意識) の結合が (生じる。) (2)意識における行為の継続のために、意識が、自己の感覚器官がない領域である心臓の内側に、安定した形で静止する。その時、「意識が停止した」と言われる。(3)そして、意識が停止したところで、感覚器官の集合体が停止した状態になる。このような状態において、継続的に連続した呼吸が現れた場合に、睡眠という名前の自我との特殊な結合によって、そして潜在印象 (saṃskāra) によって、感覚器官を媒介としてのみ、全く存在しない諸対象において、直接知覚の形をした、夢の知識が生じる<sup>55</sup>。

この夢は3種類である。すなわち、(1)強い潜在印象 (saṃskāra : 潜勢力)によるもの、(2)体調不良(dhātu-doṣa)によるもの、(3)不可見力(adr̥ṣṭa)によるもの、である。その中で、まず(1)強い潜勢力によるものは、欲求や怒りを持つものが、その対象を深く思い込んで眠る時、まさにその思考の連続が、直接知覚の形で生じる。(2)体調不良によるものは、(以下のようなものである)。風が強すぎるか損なわれている人が、空を飛ぶ(夢を)見る。胆汁が強すぎるか損なわれている人が、火に入ったり黄金の山を見たりする(夢を)見る。粘液が強すぎる人か損なわれた人が、河川や海の横断や雪山(の夢を)見る。(3)自ら経験したこと、あるいは経験しなかったことにおいて、よく知られたことあるいはよく知られてないことにおいて、象に乗ることや傘を得るといった幸運を知らしめる夢は、すべて潜在印象と善(dharma)によって生じる。一方、反対に、油を塗る、ラクダに乗るといった(悪いことを知らしめる夢は)、すべて悪(adharma)と潜在印象から生じる。(4)全く知らない対象において(の夢)は、ただ不可見力によってのみ(生じる)。

夢の(終わりに)<sup>56</sup>際した知識(svapna-antika)は、感覚器官の集合体が停止して

<sup>55</sup>この場合、因果論的には、自我と意識の特殊な結合 (=睡眠) が非内属因であり、これは後述する記憶と同じである。したがって、夢は記憶を基礎とした過去に関する非知識である。

Cf. Vy : atha evaṃ pralīna-manaskasya uparata-indriya-grāmasya ātmanah kutaḥ svapna-jñānam utpadyate\_ity āha ātma-manah saṃyoga-viśeṣāt asamavāyi-kāraṇāt, svāpa ity ākhyā saṃjñā yasya ātma-manah saṃyoga-viśeṣasya āsau tathā ukthas tasmāt | (Vy(1) : Vol. 2, p. 164, ll. 19~22) (このように、その時消え去った意識と停止した感覚器官と自我の集積があり、ここから自我と意識の特殊な結合という非内属因から、夢の知が生じる、といわれる。このように、自我と意識の結合である睡眠という名称の概念が、これによって、これら(の名称)において、このようにいわれる。そして、(動力因である)潜在印象から(夢の知が生じる)。)

<sup>56</sup>NKにしたがって補足する。

Cf. NK : kadācit svapna-dṛṣṭasya arthasya svapna-avasthāyām eva pratisandhānam bhavati ayaṃ mayā dṛṣṭa iti tac ca pūrva-anubhūtasya svapnasya ante ' vasāne bhvati\_iti svapna-antikam ucyate | (PBh(1):p.175,l.26~176,l.2) (ある時、夢で見たものは、夢の状態においてのみ回想がある。「これは、私によってみられた。」と。そして、これは以前に経験した夢の終わりにおいて存在し、夢の際の知識と言われ

いるといえども、過去の知識の継続の確認のために、まさに記憶にほかならない。  
これが4種類の非知識である。

る。)

## (0) 知識の種類

<18>

[233] vidyā apī catur-yidhā | pratyakṣa-lūṅgika-smṛty-ārya-lakṣaṇā | |

知識は、4種類である。直接知覚・推論・記憶・想像知を特徴とする。

## (1) 直接知覚(pratyakṣa)

<32>

[234] tatra-akṣam akṣam prāpīty<sup>7</sup> upadyate itī pratyakṣam | akṣāṇi-  
indriyāṇi ghrāṇa-rasana-cakṣu-tyak-chrotra-manāpī aṣṭ | [235] tad dhi  
dravya-ādīṣu padārtheṣu utpadyate | dravye tāvat tri-vidhe mahaty aneka-  
dravyavattva-ubhūta-rūpa-prakāṣe-catuṣṭaya-sannikarṣād dharmo-ādi-  
sāmagrye ca svarūpa-ālocana-mātram | sāmānya-viśeṣa-dravya-guṇa-  
karma-viśeṣaṇa-apekṣād ātma-manaḥ sannikarṣāt pratyakṣam utpadyate  
sat dravyam pṛthivi viṣṇi śuklo rasur gacchati iti | [236] rūpa-rasa-  
gandha-sparśeṣv aneka-dravya-samsvāyāt sva-gata-viśeṣāt sva-āśraya-  
sannikarṣān niyata-indriya-nimittam utpadyate | [237] śabdāya traya-  
sannikarṣac chrotra-samavetasya teṣa eva upalabdhiḥ | [238] saṅkhyā-  
parimāṇa-pṛthaktva-samyoga-vibhāga-paratva-aparatva-sneha-dravatva-  
vega-karmaṇām pratyakṣa-dravya-samavāyāc cakṣuḥ-sparśa-nābhyām  
grahṇam | [239] buddhi-sukha-duḥkha-icchā-dvēṣa-prayatanāṇām dvayor  
ātma-mānsoḥ samyogād upalabdhiḥ | [240] bhāva-dravyatva-guṇatva-  
karmatva-ādīnām upalabhyā-ādāra-samavetanām āśraya-grāhaksir  
indriyair grahṇam ity etad asamad-bhīnām pratyakṣam | [241] samad-  
yūctānām tu yogiṇām yuktānām yoga-ja-dharma-anugṛhitānā manasā  
svātma-antara-ākāśa-dih-kāla-parameṣṭhau-vāyu-manasau tat-samaveta-  
guṇa-karma-sāmānya-viśeṣeṣu samavāye ca avitatham svarūpa-darśanāc  
utpadyate | [242] vīryuktānām jñānāc catuṣṭaya-sannikarṣād yoga-ja-  
dharmo-anugraha-sāmarthyāt śūkṣmā-vyavahita-vīprakṣeṣeṣu pratyakṣam  
utpadyate | [243] tatra sāmānya-viśeṣeṣu svarūpa-ālocana-mātram  
pratyakṣam pramāṇam prameyā dravya-ādīṇaḥ padārthāḥ pramāṇa tathā

<sup>7</sup>WPR26. utpadyateとあるが、PBMによっててう誤り。

## 2 知識(vidyā)

### (0)知識の種類

<98>

[233] vidyā\_ api catur-vidhā | pratyakṣa-laiṅgika-smṛty-ārṣa-lakṣaṇā | |

知識は、4種類である。直接知覚・推論・記憶・聖仙知を特徴とする。

### (1)直接知覚(pratyakṣa)

<99>

[234] tatra-akṣam akṣam pratītya<sup>57</sup>\_ upadyate\_ iti pratyakṣam | akṣāṇi-  
indriyāṇi ghrāṇa-rasana-cakṣus-tvak-chrotra-manāṃsi ṣaṭ | [235] tad dhi  
dravya-ādiṣu padārtheṣu\_ utpadyate | dravye tāvat tri-vidhe mahaty aneka-  
dravyavattva-udbhūta-rūpa-prakāśa-catuṣṭaya-sannikarṣād dharma-ādi-  
sāmagrye ca svarūpa-ālocana-mātram | sāmānya-viśeṣa-dravya-guṇa-  
karma-viśeṣaṇa-apekṣād ātma-maṇḥ sannikarṣāt pratyakṣam utpadyate  
sad dravyam pṛthivī viśānī śuklo gaur gacchati\_ iti | [236] rūpa-rasa-  
gandha-sparśeṣv aneka-dravya-samavāyāt sva-gata-viśeṣāt sva-āśraya-  
sannikarṣān niyata-indriya-nimittam utpadyate | [237] śabdasya traya-  
sannikarṣāc chrotra-samavetasya tena\_ eva\_ upalabdhiḥ | [238] saṃkhyā-  
parimāṇa-pṛthaktva-saṃyoga-vibhāga-paratva-aparatva-sneha-dravatva-  
vega-karmaṇām pratyakṣa-dravya-samavāyāc cakuṣuḥ-sparśa-nābhyām  
grahaṇam | [239] buddhi-sukha-duḥkha-icchā-dveṣa-prayatnānām dvayor  
ātma-manasoḥ saṃyogād upalabdhiḥ | [240] bhāva-dravyatva-guṇatva-  
karmatva-ādīnām upalabhya-ādihāra-samavetanām āśraya-grāhakair  
indriyair grahaṇam ity etad asamad-ādīnām pratyakṣam | [241] asmad-  
viśiṣṭānām tu yoginām yuktānām yoga-ja-dharma-anugṛhītena manasā  
svātma-antara-ākāśa-dik-kāla-paramāṇu-vāyu-maṇḥsu tat-samaveta-  
guṇa-karma-sāmānya-viśeṣeṣu samavāye ca\_ avitatham svarūpa-darśanam  
utpadyate | [242] viyuktānām punaś catuṣṭaya-sannikarṣād yoga-ja-  
dharma-anugraha-sāmarthyāt sūkṣma-vyavahita-viprakṛṣṭeṣu pratyakṣam  
utpadyate | [243] tatra sāmānya-viśeṣeṣu svarūpa-ālocana-mātram  
pratyakṣam pramāṇam prameyā dravya-ādoyah padārthāḥ pramātā "tmā

<sup>57</sup>WPRでは、'sot padayat'とあるが、PBh(1)によってこう読む。



pramitir dravya-ādi-viṣayaṃ jñānam | [244] sāmānya-viśeṣa-jñāna-utpattāv  
 avibhaktam ālocana-mātram pratyakṣam pramāṇam asmin nānyat  
 pramāṇa-antaram asti aphala-rūpatvāt | [245] athavā sarveṣu padārtheṣu  
 catuṣṭaya-sannikarṣād avitatham avyapadeśyaṃ yaj jñānam utpadyate tat  
 pratyakṣam pramāṇam prameyā dravya-ādayaḥ padārthāḥ pramātā " tmā  
 pramitir guṇa-doṣa-mādhyasthya-darśanam iti ||

その中で、それぞれの感覚器官 (akṣa) によって生じるのが直接知覚である。感覚器官は、鼻・舌・眼・皮膚・耳・意識の6つの器官 (indriya) である。

これは、実に、実体などのカテゴリーにおいて生じる。実体において (の直接知覚) は、3種の大なる実体において、多数の実体を持つことから、見える色が生じていることから、4者 (感覚器官・対象・意識・自我) の接触から、また善などの集積した場合に、単に本質を見ることのみ (の知覚) がある。そして、普遍・特殊・実体・属性・運動といった限定するものを待って、自我と意識の接触により、直接知覚が生じる。「存在し、実体であり、地であり、角を持つものであり、白である、牛が行く」というように<sup>58</sup>。

色・味・香り・触においては、多数の実体との内属から、自己に含まれる特殊性から、自己の基体との接触から、(それぞれに) 決まった感覚器官を動力因 (nimitta) として生じる。

音は、耳に内属しており、3者の接触から、まさにこれ (耳) によって知覚される。数・量・別異性・結合・分離・かなた性・こなた性・粘性・流動性・ヴェーガ・運動は、直接知覚される実体に内属しているので、視覚もしくは触覚によって把握される。

知識・楽・苦・欲求・嫌悪・意志的努力は、自我と意識の2者の結合から把握される。

有性 (bhāva)<sup>59</sup>、<実体性 (dravyatva)>、<属性性 (guṇatva)>、<運動性 (karmatva)>等は、知覚されるべき基体 (ādhāra) に内属したとき、その基体 (āśraya)<sup>60</sup>を知覚する器官によって把握される。これが、私たち等の直接知覚である。

一方、我々とは異なったヨーガ行者が、ヨーガに専心しているときは、ヨーガより生ずる法 (dharma)<sup>61</sup>に助けられた意識によって、自我、他 (我)、虚空、空間、時間、原子、意識について、また、それらに内属した属性、運動、普遍、特殊について、さらに内属について、真実の本質の知見が生ずる。

さらに、ヨーガを離れた (=ヨーガをしていない) 時は、ヨーガにより生じた法 (dhrama) の助けの効果による四者 (=対象、感覚器官、意識、自我 (アートマン)) の接触から、微細なもの、(何かに) 隔てられたもの、遠く離れたものについての直接知覚が生じる。

<sup>58</sup>この場合、因果論的な関係は、自我が内属因、自我と意識の結合が非内属因、実体性等の限定するものが動力因である。

Cf. Vy : nanu catuṣṭaya-sannikarṣasya apavādam vinā ūrdhvaṃ sarvatra anuvṛtter abhyupagamād vyartham ātma-maṇaḥ sannikarṣasya abhidhānam? na, anantara-jñāne 'py asya asamavāyīkāraṇatva-jñāpana-arthatvāt | (Vy(1) : Vol. 2, p. 142, ll. 5~7) (4者の接触の (記述が)、後ろに全ての点で反駁なしに反復され認められているので、「自我と意識の結合」の記述は無用なのではないのか? 否、継続した知識において、また、それが非内属因であることを指示する意味から (必要である)。)

<sup>59</sup>これはsattāと同義である。このsattāを野沢正信氏は、「有の普遍」と訳している。

<sup>60</sup>これはādhāraと同義で、実質的には実体 (dravya) である。

<sup>61</sup>この場合、dhrama-adharmaと対義語になっていないので、中立的な法と訳す。

その中で、特殊な普遍<sup>62</sup> (=限定するもの)において、本質を見ることだけの直接知覚が、認識手段 (pramāṇa) である。認識対象(prameya)は、実体などのカテゴリーである。認識主体 (pramātṛ) は、自我である。認識結果 (pramiti) は、実体などを対象とした知識である<sup>63</sup>。

特殊と普遍の知識の発生においては、未分化な単なる見ることだけ (avibhakta ālocana-mātra) の直接知覚が、認識手段である。ここで、別の認識手段は存在しない。(なぜなら、) 結果のない性質を持つからである。

また、全てのカテゴリーにおいて、4者の接触から、真実の、表現しがたい知が生じる。この時、直接知覚が、認識手段である。認識対象は、実体などのカテゴリーである。認識主体は、自我であり、認識結果は、良い点 (guṇa) ・欠陥・中立の知見である。

## (2)推論(anumāna)

### ①徴証

<100>[246] liṅga-darśanāt samjāyamānaṃ laiṅgikam ||

<101>[247] liṅgaṃ punaḥ yad anumeyena sambaddhaṃ prasiddhaṃ ca tad-anvite | tad-abhāve ca na\_asty eva tal liṅgam anumāpakam ||

viparītam ato yat syād ekena dvitayena vā | virūddha-asiddha-sandigdham aliṅgaṃ kāśyapo' bravīt ||

<102>[248] yad anumeyena\_arthena deśa-viśeṣe kāla-viśeṣe vā saha-caritam anumeya-dharma-anvite ca\_anyatra sarvasminn eka-deśe vā prasiddham anumeya-viparīte ca sarvasmin pramāṇato ' sad eva tad aprasiddha-arthasya\_anumāpakaṃ liṅgaṃ bhavati\_iti ||

<103>[249] yat tu yathā\_uktāt tri-rūpāl liṅgād ekena dharmeṇa dva-abhyāṃ vā viparītaṃ tad anumeyasya\_adhigame liṅgaṃ na bhavati\_ity etad eva\_āha sūtra-kāraḥ aprasiddho ' napadeśo ' san sandigdhas ca\_iti ||

推論された(知識)は、徴証を見ることによって生じる。

徴証とは、以下のようなものである。推理対象と結合し、それが伴われるものに成立し、またそれが存在しないものには決して存在しないもの、これが推論をさせる徴証である。一つの、あるいは二つの点でこれに反対する点があるとすれば、

(1) 矛盾な・(2) 不成立な・(3) 疑わしい非徴証である、とカーシャパは言った。

特定の場所においてまたは特定の時間において、推論対象に伴われたもの、他の推論対象の性質に伴われたもの全てにおいてあるいは一箇所においてよく知られたもの、また、推論対象と反対のもの全てにおいて、認識手段により決して存在しないとされるもの、これが、よく知られていない対象を推論させる徴証である。

<sup>62</sup>前註1参照。

<sup>63</sup>この認識主体、認識手段、認識結果は、プラシャスタパーダの因果論では、それぞれ内属因、動力因結果にあたる。そして、非内属因は、自我と意識の結合である。

しかし、そこで言われた3つの相 (rūpa) の徴証と、その一つの性質あるいは二つの性質によって対立するものは、推論対象の確認における徴証ではない。これは、まさにスートラ作者が、「よく知られていないもの (aprasiddha) は非因 (apadeśa) である。」<sup>64</sup>「非存在と疑惑もそうである。」<sup>65</sup>と述べていることである。

## ②自己のための推論 (推理)

<104>

[250] vidhis tu yatra dhūmas tatra\_agnir agny-abhāve dhūmo ' pi na bhavati\_iti | evaṃ prasiddha-samayasya\_asandigdha-dhūma-darśanāt sāhacarya-anusmaraṇāt tad-anantaram agny-adhyavasāyo bhavati\_iti | evaṃ sarvatra deśa-kāla-avinābhūtam itarasya liṅgam | [251] śāstre kārya-ādi-grahaṇaṃ nidarśaṇa-arthaṃ kṛtaṃ na\_avadhāraṇa-arthaṃ kasmād vyatireka-darśanāt | tad yathā\_adhvaryur oṃ śrāvayan vyavahitasya hotur liṅgam candra-udayaḥ samudra-vṛddheḥ kumuda-vikāśasya ca śaradi jala-prasādo ' gastyā-udayasya\_iti | evam-ādi tat sarvam asya\_idam iti sambandha-mātra-vacanāt siddham | [252] tat tu dvi-vidham | dṛṣṭaṃ sāmānyato dṛṣṭaṃ ca | [253] tatra dṛṣṭaṃ prasiddha-sādhyayor atyanta-jāty-abhede ' numānam | yathā gavy eva sāsna-mātram upalabhya deśa-antare ' pi sāsna-mātra-darśanād gavi pratipattiḥ | [254] prasiddha-sādhyayor atyanta-jāti-bhede liṅga-anumeya-dharma-sāmānyā-anuvṛttito ' numānaṃ sāmānyato dṛṣṭaṃ | yathā karṣaka-vaṇig-rājapuruṣāṇāṃ ca pravṛtteḥ phalavattvam upalabhya varṇa-aśramiṇām api dṛṣṭaṃ prayojanam anuddiśya pravarta-mānānām phala-anumānam iti | [255] tatra liṅga-darśanaṃ pramāṇaṃ pramitir agni-jñānam | athavā ' gni-jñānam eva pramāṇaṃ pramitir agnau guṇa-doṣa-mādhyasthya-darśanam ity etat sva-niścītārtham anumānam ||

ところで、(推論の) 規定 (方式: vidhis) は、「煙のある所に火がある。火がない時には、煙もまたない。」というものである。

このように、一致 (samaya) を知るものが、疑惑のない煙を見ることから、同伴の追想によって、その直後に火の決定した知識がある。このように、全ての (推理) において、場所・時間的に (推論対象から) 不可分離のものが、他のもの (を推論させる) 徴証である。

論典における「結果など」<sup>66</sup>ということばは、例 (artha) を示すためになされ

<sup>64</sup>Cf. VS : aprasiddho ' napadeśaḥ | 3-1-10 (VSC : p. 26, l. 17) (よく知られていないものは、非因である。)

<sup>65</sup>Cf. VS : asan sandigdhaś ca\_anapadeśaḥ | 3-1-11 (VSC : p. 27, l. 1.) (非存在と疑惑も非因である。)

<sup>66</sup>Cf. VS : asya\_idaṃ kāryaṃ kāraṇaṃ sambandhi eka-artha-samavāyī virodhi ca\_iti laiṅgikam 19-18 (VSC : p. 69, ll. 12~13.) (これはこれの、結果である、原因である、結合したものである、一つの対象と内属したものである、矛盾するものである、というのは、徴証を見ること (laiṅgika) で知られる。)



たのであり、制限（確定：avadhāraṇa）のためではない。なぜなら、例外が見られるからである。これは、例えば、アドヴァリユ祭官がオームと唱える時、隔てられていても（そのオームが）ホートリー祭官のいる徴証である<sup>67</sup>。（同様に）月の上昇は、満潮と白睡蓮の開花の（徴証であり）、秋に水が清らかになるのは、アガスティヤ星の上昇の（徴証である）ように。これらのことなどは、「これは、それの（徴証である）」と結合のみを言うことによって、証明される。

ところで、これは2種類である。すなわち、「経験される（dṛṣṭa：見られる）知」と「一般的な関係性<sup>68</sup>により経験される（sāmānyato dṛṣṭam）知」である。

その中で、「経験される知」は、よく知られているものと証明されるべきもの（＝推論対象）の、種類の区別が完全でない時の推論である。例えば、牛のみに咽の垂れた肉だけを認めていて、他の場所でも咽の垂れた肉のみを見ることにより、牛と知る（推論で）ある。

「一般的な関係性により経験される知」は、よく知られたことと証明されるべきもの（＝推論対象）の、種類の区別が完全にある時、徴証と推論対象の性質の普遍が適合する推論である。例えば、農夫・商人・王の家臣の就業が結果を有することを認めて、結果を推論することである。また、ヴァルナや生活期に従うものが、目に見える結果を意図せず行動して、結果を推論することである。

この中で、徴証を見ることが、認識手段であり、認識結果は火の知識である。あるいは、火の知識がまさに認識手段であり、認識結果は、火の良い点・欠陥・中立をみることである<sup>69</sup>。以上が、自己の決定のための推論である。

## (a)言葉(śabda)

<105>

[256] śabda-ādīnām apy anumāne ' ntarbhāvaḥ samāna-vidhitvāt | yathā prasiddha-samayasya asandigdha-līṅga-darśana-prasiddhy-anusmaraṇābhyām atīndriye ' rthe bhavaty anumānam evaṃ śabda-ādibhyo ' pi iti | [257] śruti-smṛti-lakṣaṇo ' py āmnāyo vaktṛ-prāmāṇya-apekṣaḥ tad-vacanād āmnāya-prāmāṇyam līṅgac ca anityo buddhi-pūrvā vākya-kṛtir vede buddhi-pūrvō dadātir ity uktatvāt ||

（聖典の）言葉なども、また推論に含まれる。同一の規定であるから。例えば、一致をよく知るものが、疑いのない徴証をみることと、よく知られていることの想起によって、超感覚的な対象における推論がある。このようにして、言葉などによる（推論がある。）

天啓・伝承という特徴を持った聖典も、話者の権威を待って、「それが言われるので、聖典の権威がある。」<sup>70</sup>「また、徴証によって、無常である。」<sup>71</sup>「ヴェーダに

<sup>67</sup>アドヴァリユ祭官とホートリー祭官は、ヴェーダ祭式に携わる4人の司祭僧のうちの二人である。NKによれば、アドヴァリユ祭官はホートリー祭官にオームという声を聞かせ、他の人には聞かせないとされる。したがって、このことを知っていれば、隔てられていてもホートリー祭官の存在を推論できるということである。

<sup>68</sup>これは、宮元啓一氏の訳語にしたがっている。宮元啓一「勝宗十句義論における二種の推論」『印度哲学仏教学』第12号・1997年参照。

<sup>69</sup>ここでも、直接知覚同様に、認識主体・認識手段・認識結果は、それぞれ内属因、動力因結果にあたる。そして、非内属因は、同じく自我と意識の結合である。

<sup>70</sup>Cf. VS : tad-vacanād āmnāya-prāmāṇyam ||1-1-3 (VSC : p. 2, l. 6) (彼（ヒラニヤガルバ）の



において、文を作ることは、知識に基づく。」<sup>72</sup>「布施（の命令）は、知識に基づく」<sup>73</sup>と、『ストラ』に述べられているからである。

### (b)身振り(ceṣṭa)

<106>

[258] prasiddha-abhinayasya ceṣṭayā pratipatti-darśanāt tad apy anumānam eva ||

演技をよく知るものが、身振りによって理解することが知られているので、これもまた推論に他ならない。

### (c)類推(upamāna)

<107>

[259] āptena-aprasiddha-gavayasya gavā gavaya-pratipādanād upamānam āpta-vacanam eva ||

信頼できる人が、水牛をよく知らない人に、牛によって水牛を教示することから、類推も信頼できる人の言葉（＝推論）に他ならない。

### (d)意味の含み(arthāpatti)

<108>

[260] darśana-arthād arthāpattir virodhy eva śravaṇād anumita-anumānam |

対象を見ることによる意味の含み（arthāpatti）は、矛盾（による推論）に他ならない。聞くことによる意味の含みは（すでに）推論された（ものによる）推論である。

### (e)共在(sambhava)

<109>

[261] sambhavo 'py avinābhāvitvād anumānam eva ||

言葉であることから、聖典には確実性がある。）

<sup>71</sup>Cf. VS : liṅgās ca anityaḥ | 2-2-37 (VSC : p. 23, l. 5) (そして、(ヴェーダの) 徴証から、無常である。)

<sup>72</sup>Cf. VS : buddhi-pūrvā vākya-kṛtir vede | 6-1-1 (VSC : p. 45, l. 4) (ヴェーダにおける文章の配列は、知識に基づいている。)

<sup>73</sup>Cf. VS : buddhi-pūrvā dadātiḥ | 6-1-4 (VSC : p. 45, l. 18) (布施は、知識に基づく。)

共在 (sambhava) もまた、不可分離性のゆえに、推論 (の対象) に他ならない。

#### (f)非存在(abhāva)

<110>

[262] abhāvo ' py anumānam eva yathā\_ utpannam kāryam kāraṇa-  
sadbhāve liṅgam | evaṃ anutpannam kāryam kāraṇa-asadbhāve liṅgam  
||

非存在もまた、推論に他ならない。例えば、発生した結果が原因の实在の徴証である。同様に、発生しない結果は、原因が实在しないことの諸相である。

#### (g)口伝(aitihya)

<111>

[263] tathā\_ eva\_ aitihyam apy avitatham āpta-upadeśa eva\_ iti ||

同様に、虚偽でない口伝もまた、信頼できる教え (=推論) に他ならない。

### ③他人のための推論 (論証)

<112>

[264] pañca-avayavena\_ eva vākyaena saṃśayita-viparyastāvya-utpannānām  
pareṣām sva-niścita-artha-pratipādanam parārtha-anumānam vijñeyam ||

5支の文章によって、疑い・誤解し・まだ了解していない他人に自己の判断した知識 (niścita-artha) を教示することが、他人のための推論と知るべきである。

#### (a)主張(pratijñā)

[266] tatra\_ anumeya-uddeśo ' virodhī pratijñā | prati-pipādayiṣita-  
dharma-viśiṣṭasya dharmiṇo ' padeśa- viṣayam āpādayitum uddeśa-mātram  
pratijñā | yathā dravyam vāyur iti | [267] avirodhi-grahaṇāt pratyakṣa-  
anumāna-abhyupagata-sva-śāstras-vavacana-virodhino nirastā bhavanti |  
yathā ' nuṣṇo ' gnir iti pratyakṣa-virodhī ghanam ambaram ity anumāna-  
virodhī brahmaṇena surā peya\_ ity āgama-virodhī vaiśeṣikasya sat kāryam  
iti bruvataḥ sva-śāstra-virodhī na śabdho ' rtha-pratyāyaka iti sva-vacana-  
virodhī ||

その中で、推論対象の矛盾なき指示が、主張である。指示対象を提示するために、

提示しようとする性質 (dharma) に限定された主体 (dharmin) を論述することだけが、主張である。例えば、「風は実体である」というようなものである。

「矛盾なき」という記述によって、直接知覚・推論・認容された自派の論典・自分の言葉との矛盾が退けられた。例えば、「火は熱くない」というのは直接知覚に矛盾し、「虚空は緊密である」というのは推論と矛盾し、「スラー酒はバラモンによって飲まれるべき」というのは聖典に矛盾し、ヴァイシェーシカ学派が「因中有果」と自称することは自派の論典に矛盾し、「語は、意味を理解させない」というのは自分の言葉に矛盾する。

## (b)指示(apadeśa)

<114>

[268] liṅga-vacanam apadeśaḥ | yad anumyena saha-caritaṃ tat-samāna-jātiye sarvatra sāmānyena prasiddhaṃ tad-viparīte ca sarvasminn asad eva tal liṅgam uktaṃ tasya vacanam apadeśaḥ | yathā kriyāvattvād guṇavattvāc ca tathā ca tad anumeye ' sti tat-samāna-jātiye ca sarvasmin guṇavattvam asarvasmin kriyāvattvam | ubhayam apy etad adravye na\_asty eva tasmāt tasya vacanam apadeśa iti siddham ||

徴証を述べるのが、指示である。(1)推論対象と共にあること (anumyena saha-caritaṃ)、(2) それ(推論対象)と同種のもの全てにおいて、普遍によってよく知られているもの、また(3)それと反するもの全てにおいて、必ず非存在であるもの、これが徴証と言われるものであり、これ(徴証)を言うことが、指示である。例えば、(『スートラ』に)「運動を有することから、また、属性を有することから。」<sup>74</sup>というようなものである。このように、推論対象に存在し、また、それと同種のもの(=実体)全てにおいて属性を有することがあり、運動を有することは全てには存在しない(=有形の実体のみ)、ということである。また、両者は、実体でないものには存在しない。したがって、まさに、このことを述べるのが指示であることが証明された。

## (b)-1非指示性(anapadeśatva)

<115>

[269] etena\_asiddha-viruddha-sandigdha-anadhyavasita-vacanānām anapadeśatvam uktam bhavati | [270] tatra-asiddhaś catur-viddhaḥ | ubhaya-asiddho ' nyatara-asiddhas tad-bhāva-asiddho ' numeya-asiddhaś ca\_iti | tatra\_ubhaya-asiddha ubhayor vādi-prativādinor asiddho yathā ' nityaḥ śabdaḥ sā\_avayavatvād iti | anyatara-asiddho yathā ' nityaḥ śabdaḥ kāryatvād iti | tad-bhāva-asiddho yathā dhūma-bhāvena\_agny-adhigatau kartavyāyām upanyasyamāno bāṣpo dhūma-bhāvena\_asiddha iti | anumeya-asiddho yathā pārthivaṃ dravyaṃ tamaḥ kṛṣṇa-rūpavattvād iti | [271] yo hy anumeye ' vidya-māno ' pi tat-samāna-jātiye sarvasmin

<sup>74</sup>Cf. VS : kriyāvattvāt guṇavattvāc ca | 2-1-12 | (VSC : p. 12, l. 22) (運動を有することから、また、属性を持つことから。)

na\_asti tad-viparīte ca\_asti sa viparīta-sādhanād viruddho yathā yasmād  
viṣāṇī tasmād aśva iti | [272] yas tu sann anumeye tat-samāna-asamāna-  
jāṭiyayoḥ sādharmaṇaḥ sann eva sa sandeha-janakatvāt sandigdho yathā  
yasmād viṣāṇī tasmād gaur iti | [273] ekasmiṃś ca dvayor hetvor  
yathā\_ukta-lakṣaṇayor viruddhayoḥ sannipāte sati saṃśaya-darśanād  
ayam anyaḥ sandigdha iti kecit | yathā mūrtatva-amūrtatvaṃ prati  
manasaḥ kriyāvattva-asparśavattvayor iti | [274] nanv ayam asādharmaṇa  
eva\_acākṣuṣatva-pratyakṣatvavat saṃhatayor anyatara-pakṣā-sambhavāt  
tataś ca\_anadhyavasita iti vakṣyāmaḥ | [275] nanu śāstre tatra  
tatra\_ubhayathā dharsanam saṃśaya-kāraṇam apadiśyata iti na saṃśayo  
viśaya-dvaita-darśanāt | saṃśaya-uttpattau viśaya-dvaita-darśanam  
kāraṇam tulya-balatve ca tayor paraspara-virodhān nirṇaya-  
anutpādatvam syān na tu saṃśaya-hetutvam na ca tayor tulya-  
balavattvam asti anyatarasya\_anumeya-uddeśasya\_āgama-bādhitatvād  
ayam tu viruddha-bheda eva | [276] yaś ca\_anumeye vidyamānas tat-  
samāna-asamāna-jāṭiyayor asann eva so 'nyatara-asiddho' nadhyavasāya-  
hetutvād anadhyavasito yathā sat kāryam utpatter iti | ayam aprasiddho'  
napadeśa iti vacanād avaruddhaḥ | [277] nanu ca\_ayam viśeṣaḥ saṃśaya-  
hetur abhihitāḥ śāstre tulya jāṭīyeṣv artha-antara-bhūteṣu  
viśeṣasya\_ubhayathā dṛṣṭatvād iti na\_anya-arthatvāc chabde viśeṣa-  
darśanāt | saṃśaya-anutpattir ity ukte na\_ayam dravya-ādinām  
anyatamasya viśeṣaḥ syāc chrāvaṇatvam kiṃ tu sāmānyam eva  
sampadyate kasmāt tulya-jāṭīyeṣv artha-antara-bhūteṣu dravya-ādi-  
bhedānām ekaikaśo viśeṣasya\_ubhayathā dṛṣṭatvād ity uktaṃ na saṃśaya-  
kāraṇam anyathā ṣaṭsv api padārtheṣu saṃśaya-prasaṅgāt tasmāt  
sāmānya-pratyayād eva saṃśaya iti ||

これによって、(1)不成立・(2)矛盾・(3)疑惑・(4)不決定の論述の非指示性が言われた。

この中で、不成立は、4種である。すなわち、両者の不成立・片方の不成立・存在の不成立・推論対象の不成立である。その中で、両者の不成立は、論者・反論者の両方にとっての不成立である。例えば、「音声は無常である。部分からなるから。」といったものである。片方の不成立は、例えば「音声は無常である。結果であるから。」<sup>75</sup>といったものである。存在の不成立は、例えば煙の存在によって火を知ることがなされる時、霧の論述は、煙の存在によっては成立しない、といったものである。推論対象の不成立は、例えば「暗は、地の実体である。黒色を有するから。」というようなものである。

実に、推論対象において存在せず、また、それと同種のもの全てにおいても存在せず、それと反対のものに存するから、それは反対のものを証明するので、矛盾である。例えば、「角を持つので、馬である。」<sup>76</sup>というようなものである。

<sup>75</sup>Cf. VS : kāryatvāt | 2-2-32 (VSC : p. 22, l. 9) (結果であることから (音声は無常である。))

<sup>76</sup>Cf. VS : viṣāṇī tasmād aśvo viṣāṇī tasmād gaur iti ca | 3-1-12 (VSC : p. 27, l. 5) ((非指示は、)「角があるので、馬である。」「角があるから、牛である。」というようなものである。))



しかし、推論対象に存在し、それと同種・異種のものにまさしく共通に存在するものは、疑いを産出するので、疑惑である。例えば、「角を持つから、牛である。」<sup>77</sup>というようなものである。

そして、一つのものにおいて、言われた矛盾した特徴を持つ二つの原因が衝突するとき、疑惑が見られるので、「これは他の疑惑である」とある人が（言う。）例えば、意識の有形性と無形性に対して、運動を有することと触れられないことの二つの（理由が衝突する）というようなものである。

（問）これは、非共通性に他ならないのではないのか。「目に見えないこと」と「直接知覚できること」のように、集合した二つのうちの一つの主張が成立しないからである。

（答）したがって、非決定として、我々が次に述べるであろう。

（問）論典において、それぞれ両様に見ることが疑惑の原因だということが示されたのではないか。

（答）そうではない。疑惑は、対象の二相を見ることから生じるからである。疑惑の発生において、対象の二相を見るのが原因である。そして、両者の力が匹敵する時、相互に矛盾するので、決定を生じさせることはないだろう。しかし、疑惑の原因ともならないであろう。また、その両者において力が匹敵することはない。二つのうちの一つを推論対象として示すことは、聖典により排除されるからである。

（したがって、）これは矛盾の一種に他ならない。

そして、推論対象において存在し、それと同種・異種の両者に対して存在しないものは、両者のうちの不成立であり、非決定の原因であるので、非決定である。例えば、「発生するから、因中有果である。」というようなものである。これは、「よく知られていないことは、指示ではない。」<sup>78</sup>と（『スートラ』で）言われることによって妨げられている。

（問）そしてこれは、特殊が疑惑の原因であると説かれているのではないのか。論典中に、「同種のものと他の事物の両方に特殊が見られるからである。」<sup>79</sup>と（言われている。）

（答）そうではない。（それは）違う意味であるから。「音声において、特殊が見られるから、疑惑は発生しない。」といわれた時、耳で聞かれることは、実体などのどれか一つのものの特種ではないだろう。そうではなく、まさに普遍に他ならない。なぜなら、実体などの区分について、同種のものも異なる事物に対しても、それぞれ両方に特殊が見られるからである、と言われており、疑惑の原因ではない。そうでなければ、6カテゴリー全てにおいて疑惑が（生じるという）誤謬が生じるからである。したがって、普遍の観念のゆえに、まさに疑惑があるのである。

### (c) 実例 (nidarśana)

<116>

[278] dvi-vidhaṃ nidarśanaṃ sādharmyeṇa vaidharṃeṇa ca | tatra-anumeṣya-sāmānyena liṅga-sāmānyasya anuvidhāna-darśanaṃ sādharṃya-nidarśnam | tad yathā yat kriyāvāt tad dravyaṃ dṛṣṭaṃ yathā śara iti |

<sup>77</sup>Cf. VS : viṣāṇī tasmād aśvo viṣāṇī tasmād gaur iti ca | 3-1-12 (VSC : p. 27, l. 5) (非指示は、)「角があるので、馬である。」「角があるから、牛である。」というようなものである。

<sup>78</sup>Cf. VS : aprasiddho ' napadeśaḥ | 3-1-10 (VSC : p. 26, l. 17) (よく知られていないものは、指示ではない。)

<sup>79</sup>Cf. VS : tulya-jātiyeṣv artha-antara-bhūteṣu ca viśeṣasya ubhayathā dṛṣṭatvāt | 2-2-26 (VSC : p. 21, ll. 6~7) (同じ種類のもの (=属性) においても、他のもの (実体・運動) においても、双方ともに特殊性が見られるから、(実体か属性か運動かという疑いがある。)

anumeya-viparyaye ca | liṅgasya\_abhāva-darśanam vaidharmya-  
nidarśanam | tad yathā yad adravyam tat kriyāvan na bhavati yathā  
sattā\_iti ||

实例は、共通性によるものと異質性によるものの2種類である。

その中で、推論対象の普遍と徴証の普遍との共通性が見られるものが、共通性による实例である。例えば、「運動を有するものは、実体である。矢のように。」というようなものである。

推論対象と反対のものにおいて、徴証の不在を見ることが、異質性による实例である。例えば、「実体でないものは、運動を有しない。存在性 (sattā) のように。」というものである。

### (c)-1 偽の实例(nidarśana-abhāsa)

<117>

[279] anena nidarśana-abhāsā nirastā bhavanti | tad yathā nityaḥ śabdo ' mūrtatvāt yad amūrtam dr̥ṣṭam tan nityam yathā paramāṇur yathā karma yathā sthālī yathā tamo ' mbaravad iti yad dravyam tat kriyāvad dr̥ṣṭam iti ca liṅga-anumeya-ubhaya-āśraya-asiddha-ananugata-viparīta-anugatāḥ sādharma-nidarśana-abhāsāḥ | [280] yad anityam tan mūrtam dr̥ṣṭam yathā karma yathā paramāṇur yathā "kāsam yathā tamaḥ ghaṭavat yan niṣkriyam tad adravyam ca\_iti liṅga-anumeya-ubhaya-avyāvṛtta-āśraya-asiddha-avyāvṛtta-viparīta-vyāvṛttā vaidharmya-nidarśana-abhāsā iti ||

これによって、偽物の实例は退けられた。例えば、

[主張] 音声は恒常である。

[理由] 形を持たないから。

[实例] およそ形がないものは、全て恒常であると知られる。例えば、原子のように。例えば、運動のように。例えば、皿のように。例えば暗のように。例えば虚空のように。およそ実体であるものは、全て運動を有すると知られる。

これらは、(1)徴証の不成立(2)推論対象の不成立(3)両方の不成立(4)基体 (āśraya) の不成立(5)不随行 (ananugata) (6) 逆随行 (viparīta-anugata) という共通性による实例の偽物である。

[实例] およそ無常なものは、すべて有形であると知られる。例えば、運動のように。原子のように。虚空のように。暗のように。瓶のように。およそ運動を有しないものは、すべて実体ではない。

(これらは、) (1)徴証の非除外 (liṅga-avyāvṛtta) (2)推論対象の非除外 (anumeya-avyāvṛtta) (3)両者の非除外 (ubhaya-avyāvṛtta) (4)基体の不成立 (āśraya-asiddha) (5) 非除外 (avyāvṛtta) 、 (6) 逆の非除外 (viparīta-vyāvṛttā) という異質性による实例の偽物である。

### (d)適用(anusandhāna)

<118>

[281] nidarśane ' anumeya-sāmānyena saha dr̥ṣṭasya liṅga-

sāmānyasya\_anumeye ' nvānayanam anusandhānam | anumeya-dharma-  
mātratvena\_abhihitam liṅga-sāmānyam anupalabdha-śaktikaṃ nidarśane  
sādhya-dharma-sāmānyena saha dṛṣṭam anumeye yena  
vacanena\_anusandhīyate tad anusandhānam | tathā ca vāyuh kriyāvān iti  
| anumeya-abhāve ca tasya\_asattvam upalabhya na ca tathā vāyur  
niṣkriya iti ||

実例において、推論対象一般と共に見られる徴証一般が、推論対象にあることを導く<sup>80</sup>ものが、適用である。徴証一般は、推論対象の性質のみによって言われ、能力が認知されていないで、実例において証明されるべき性質一般とともに見られる。推論対象において、その言述によって適用されるもの、これが、適用である。「そして、このように、風もまた運動を有する」というように。推論対象がない時、その非存在を認めて、「そして、このように、風は、運動を有しないことはない」というようなものである。

### (e)結論(pratyāmnāya)<sup>81</sup>

<119>

[282] anumeyatvena\_uddiṣṭe ca\_aṅīscite ca pareṣāṃ niścaya-apādana-  
artham pratijñāyāḥ punar-vacanam pratyāmnāyaḥ |  
pratipādyatvena\_uddiṣṭe ca\_aṅīscite ca pareṣāṃ hetv-ādibhir avayavair  
āhita-śaktinām parisamāptena vākyena niścaya-apādana-artham  
pratijñāyāḥ punar-vacanam pratyāmnāyaḥ | tasmād dravyam eva\_iti |  
[283] na hy etasminn asati pareṣāṃ avayavānām samastānām vyastānām  
vā tad-artha-vācakatvam asti gamyamāna-arthatvād iti cen na  
atiprasaṅgāt | tathā hi pratijñā-anantaram hetu-mātra-abhidhānam  
kartavyam viduṣām anvaya-vyatireka-smaraṇāt tad-artha-avagatir  
bhaviṣyati\_iti tasmād atra\_eva\_artha-parisamāptiḥ | [284] anityaḥ śabda  
ity anena\_aṅīscita-anityatva-mātra-viśiṣṭaḥ śabdaḥ kathyate prayatna-  
anantariya-katvād ity anena\_anityatva-sādhana-dharma-mātram  
abhidhīyate | iha yat prayatna-anantariyakam tad anityam dṛṣṭam yathā  
ghaṭa ity anena sādhya-sāmānyena sādhana-sāmānyasya\_anugama-  
mātram ucyate | nityam aprayatna-anantariyakam dṛṣṭam yathā " kāsam  
ity anena sādhya-abhāvena sādhanasya\_asattvam pradarśyate | tathā ca  
prayatna-anantariyakaḥ śadho dṛṣṭo na ca tathā "kāsavad aprayatna-  
anantariyakaḥ śabda ity anvaya-vyatireka-abhyām dṛṣṭa-sāmarthyasya  
sādhana-sāmānyasya śabde ' nusandhānam gamyate tasmād anityaḥ śabda  
ity anena\_anitya eva śabda iti pratipāday-iṣita-artha-parisamāptir

<sup>80</sup>anvānayana : 辞書になし。NKによりこう解釈する。

<sup>81</sup>このpratyāmnāyaは、金倉訳と本多訳では「反復」、中村訳では「反復提起」と訳している。これは、主張の繰り返しであるという意味を持たせようとしたと思われるが、そのことは本文の定義部分で明記されているので、筆者は訳語に含意させる必要はないと考える。また、このpratyāmnāyaを明示することで、推論の知識が確定するという面を取っても、「結論」と訳することが妥当であると考えられる。



gamyate tasmāt pañca-avayavena\_eva vākyaena pareṣāṃ sva-niścita-artha-  
pratipādanam kriyate ity etat para-artha-anumānam siddham iti ||

推論対象として示されて、そして非決定であるとき、他人の決定をもたらすために主張を再び述べるのが、結論である。説明されるべきものとして示されており、かつ非決定である時、（理解する）能力を与えられた他人に、理由などの諸支分から完成された文によって、決定をもたらすために、主張を再び述べるのが結論である。すなわち、（前の「風は実体である」という論証式における）「実体に他ならない」のようなものである。

実に、これがない時、他の諸支文は、全体としても個別的にもその意味を述べることはない。

（問）意味が知られているのであるから（結論は無用である）。

（答）そうではない。なぜなら、「過剰の（包摂という）過失」があるからである。そうであるなら、主張に続いてただ原因だけの陳述がなされるべきであるし、知者においては、包摂（共通：anvaya）と除外の想起によって、その意味の了解があるだろう。したがって、ここ（＝結論）においてこそ、意味の完結があるのである。

（問）どのようにしてか。

〔主張〕「音声は、無常である。」これによって、非決定の無常性のみの特徴付けられた（限定された：viśiṣṭa）音声が言われる。

〔指示〕「意志的努力に続いて発生するから。」これによって、無常性を証明する性質が言われる。

〔同実例〕「この世において、意志的努力に続いて発生するものは、全て無常であると知られる。例えば、瓶のように。」これによって、証明されるべきもの（＝推論対象）一般への、証明するもの（＝徴証）一般の近接のみが言われる。

〔異実例〕「意志的努力に続いて発生しないものは、恒常である、と知られる。例えば、虚空のように。」これによって、証明されるもの（＝推論対象）の不在によって、証明するもの（＝徴証）の非存在が明示される。

〔適用〕「このように、音声は意志的努力に続いて発生するものであると知られており、また、音声は、虚空とは異なり、意志的努力に続いて発生しない。」と包摂と排除によって、適合が見られた証明するもの（徴証）一般が、音声に適合することが知られる。

〔結論〕「したがって、音声は無常である。」これによって、「音声は無常に違いない」という証明すべき決定（した知識）の意味の完結が知られる。

このように、まさに五支の文によってのみ、他人に自ら決定した意味を教示することがなされた。

以上で、他人のための推論が証明された。

### (3)決定(nirṇaya)

<120>

[285] viśeṣa-darśanaṃ avadhāraṇa-jñānam saṃśaya-virodhī nirṇayaḥ |

[286] etad eva pratyakṣam anumānam vā | yad viśeṣa-darśanāt saṃśaya-virodhy utpadyate sa pratyakṣa-nirṇayaḥ | yathā sthāṇu-puruṣayor  
ūrdhvatā-mātra-sādṛśya-ālocanād viśeṣeṣv apratyakṣeṣu\_ubhya-viśeṣa-



anusmaraṇāt kim ayam sthānuḥ puruṣo vā iti saṃśaya-utpattau śiraḥ-  
pāṇy-ādi-darśanāt puruṣa eva ayam ity avadhāraṇa-jñānam pratyakṣa-  
nirṇayaḥ | viśāṇa-mātra-darśanād gaur gavayo vā iti saṃśaya-utpattau  
sāsnā-mātra-darśnād gaur eva ayam ity avadhāraṇa-jñānam anumāna-  
nirṇaya iti ||

特殊を見ることから生じ、確定した知識で、疑惑と矛盾するものが、決定である<sup>82</sup>。これこそ、直接知覚あるいは推論に他ならない。特殊を見ることによって、疑惑との矛盾が生じるものが、直接知覚による決定である。例えば、杭と人間の「高さ」という点の類似点を知覚することから、諸特性を知覚しないで、(杭と人間の)両方の特殊を想起するので、これは、「杭か人間か」という疑惑が生じるとき、頭や手などを見ることから、「これは人間に違いない」という確定した知識が(ある。それが、)直接知覚による決定である。

角のみを見ることから、「牛か水牛か」という疑惑が生じるとき、のどの垂れ肉のみを見ることから「これは牛に違いない」という確定的な知識が(ある。それが)推論による決定である。

#### (4)記憶(smṛti)

<121>

[287] liṅga-darśana-icchā-anusmaraṇa-ādhy-apekṣād ātma-manasoḥ  
saṃyoga-viśeṣāt paṭv-abhyāsa-ādara-pratyaya-janitāc ca saṃskārād dṛṣṭa-  
śruta-anubhūteṣv artheṣu śeṣa-anuvyavasāya-icchā-anusmaraṇa-dveṣa-  
hetur atīta-viśayā smṛtir iti ||

記憶とは、徴証をみることや欲求や追想等を待って、自我と意識の特殊な結合から、そして、強烈さや反復や留意といった観念から生じた潜在印象(saṃskāra)から<sup>83</sup>、見たり聞いたり経験したりする対象において(生じる)、残余の確認(śeṣa-anuvyavasāya)と欲求と追想と嫌悪の原因である過去に関する知識である<sup>84</sup>。

<sup>82</sup>結局認識とは、ある特徴を見ることから始まり、最終的に、そのものだけにある特殊性をみることにより確定されるということである。これが、この学派の名称をVaiśeṣika (=特殊性)の学派とする所以である。

<sup>83</sup>ここでの非内属因は、自我と意識の特殊な結合であり、徴証をみること・欲求・追想や鋭い反復・留意といった観念から生じた潜在印象は動力因である。

Cf. Vy : ātma-manasoḥ saṃyoga-viśeṣāt ity asamavāyi-kāraṇa-nirdeśaḥ | liṅga-darśana-icchā-anusmaraṇa-ādhy-apekṣāt paṭv-abhyāsa-ādara-pratyaya-janitāc ca saṃskārāt iti nimitta-kāraṇa-nirdeśaḥ | (Vy(1) : Vol. 2. p. 212, ll. 8~11) (「自我と意識の結合から」という非内属因の記述がある。「徴証をみること・欲求・追想などを待って、また鋭い反復・留意といった観念から生じた潜在印象から」という動力因の記述がある。

<sup>84</sup>記憶は、『スートラ』では、ごく簡単に以下のように記されているのみである。

Cf. VS : ātma-manasoḥ saṃyoga-viśeṣāt saṃskārāc ca smṛti | 9-22 (VSC : p. 70, l. 11) (自我と意識の特殊な結合から、そして、潜在印象から、記憶(は生じる)。)

## (5) 聖仙知(ārṣajñāna)

### ① 聖仙知(ārṣajñāna)

<122>

[288] āmnāya-vidhātṛṇām ṛṣiṇām atīta-anāgata-vartamāneṣv atīndriyeṣv artheṣu dharma-ādiṣu grantha-upanibaddheṣv anupanibaddheṣu ca ātma-manasoḥ saṃyogād dharma-viśeṣāc ca yat prātibhaṃ yathā-artha-nivedanaṃ jñānām utpadyate tad ārṣam ity ācakṣate | tat tu prastāreṇa deva-ṛṣiṇām kadācid eva laukikānām yathā kanyakā bravīti śvo me bharātā "ganteti hṛdayaṃ me kathayati iti ||

聖典の創造者である聖仙達に、(1)過去、現在、未来のことがらにおいて、(2)超感覚的なことがらにおいて、(3)法などにおいて、(4)書物に記録されたものでも記録されていないものにおいても、自我と意識の結合から、そして特殊な法から、直観的で対象をそのまま伝える知識が生じる<sup>85</sup>。これが、聖仙知(ārṣa)である<sup>86</sup>。

この(聖仙知)は、多くは神や聖仙たちにあるが、時には世俗の人たちにもあらわれる。例えば、少女が「明日私の兄弟がやってくる、と心臓が私に語る」というように。

### ② 超人の知(siddhadarśana)

<123>

[289] siddha-darśanaṃ na jñāna-antaraṃ kasmāt prayatna-pūrvakam añjana-pādalepa-khaḍga-gulika-ādi-siddhānām dṛśya-draṣṭṛṇām sūkṣma-vyavahita-viprakṛṣṭeṣv artheṣu yad darśanaṃ tat pratyakṣam eva | atha divyā-antarikṣa-bhaumānām prāṇinām grahana-kṣatra-saṃcāra-ādī-nimittaṃ dharma-adharma-vipāka-darśanaṃ iṣṭam tad apy anumānam eva | atha liṅga-anapekṣam dharma-ādiṣu darśanaṃ iṣṭam tad api pratyakṣa-ārṣayor anyatarasmīn antarbhūtam ity evaṃ buddhir iti ||

超人の知は、もう一つの(別の種類の)知識ではない。なぜか。意志的努力に基づき、微細なもの・遮られたもの・遠ざけられたものにおいて、目薬・足に塗る薬・剣・丸薬などによって成立する見られる対象を見る者(=超人)の知は、まさに直

<sup>85</sup>聖仙知の場合も、非内属因は自我と意識の結合であり、常人の認識と同じである。ただ、動力因が特殊な法として常人のものと区別されているのである。

Cf. Vy : kutaḥ kāraṇa-ādeṣu yathā-artha-vijñānam? ātma-manasoḥ saṃyogāt asamavāyinaḥ dharma-viśeṣāc ca nimittād iti | (Vy(1) : p. 214, ll. 4~5) (どのような原因等において、その対象の知があるのか? 自我と意識の結合という非内属因と、そして特殊な法という動力因から(生じる)。)

<sup>86</sup>『スートラ』では、聖仙知と超人の知を二つまとめて、どちらも「法による」とする。

Cf. VS : ārṣaṃ siddha-darśanaṃ ca dharmebhyaḥ | 9-28 (VSC : p.71, l. 7) (聖仙と超人(siddha)の知は、法(dharma)から生じる。)

接知覚にほかならないからである。

また、天上・空中・地上の生物に関する、惑星や天体の運行などの前兆や善・悪の果報に基づく知見は、これもまた、推論にほかならない。

さらに、徴証を待たないで（生じる）、善などについての知見が認められている<sup>87</sup>。しかし、これもまた直接知覚か聖仙知かのいずれかに含まれる。

知識とは、以上である。

<sup>87</sup> 「徴証を待たないで」というのは、推論において動力因が存在しないか特定できないという意味である。したがって、推論ではない直接知覚か、聖仙知のいずれかに含まれるというのである。

## 1. サンスクリット文献および略号

AK : *The Abhidharmakośa of Vasubandhu, with the Commentary Annotated and Rendered into French from the Chinese by Dr. Louis-De La Valle's Poussin and Sanskrit Text Edited by Dr. Prahlad Pradhan, Both Translated into English by Dr. Subhadra Jha, K. P. Jaywal Research Institute, Patna, 1983.*

Bṛ : *Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad - See Ch.*

Ch : *Chāndogya-Upaniṣad - Aṣṭādśa-upaniṣadaḥ (Eighteen Principal Upaniṣads) Vol. 1, Edited by Limaye, V. P. & Vadakar, R. D., Poona, 1958.*

Kaṣ : *Prasastapādabhāṣyatīkāśaṅgrahaḥ, with Kapādarahasya of Śaṅkaranūra, The Chowkhamba saskrit series no. 231, Benares, 1917.*

Kir : *Prasastapādabhāṣyaḥ with the Commentary Kirapāvaḥ of Udayanācārya, Edited by Late Jitendra B. Jetry, Oriental Instite, Varadara (GOS No. 154), Vadodara, 1991.*

Kir(H) : *Kirapāvaḥ of Udayanācārya with HINDI translation Edited & Translation by Gaurinātha Śāstri, Research Publication Supervisor, Varanasi, 1980.*

MBh : *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patanjali, Edited by P. Kishore, 2nd ed.; revised and furnished with additional readings, references, and select critical notes by K.V. Abhyankar (3rd ed.), Bhandarkar Oriental Research*

## ■参考文献

凡例

- ・サンスクリット文献は、略号で示し、その略号のアルファベット順に配列した。
- ・サンスクリット語のローマ字表記は、原則として原著のものをそのまま使用した。
- ・漢文文献も、略号で示し、サンスクリット文献の後に置いた。
- ・二次資料の欧文文献および邦文文献は、著者-年代方式で表記し、欧文文献はアルファベット順で、邦文文献は五十音順でそれぞれわけて配列した。
- ・翻訳文献は、古代ギリシャの文献の場合は翻訳本の出版年代を記したが、近代以降の文献は原則として原著の年代を最初に表記し、文献情報の最後に翻訳本の出版年代を表記した。

### 1. サンスクリット文献および略号

**AK** : *The Abhidharmakośa of Vasubandhu, with the Commentary Annotated and Rendered into French from the Chinese by Dr. Lois De La Valle'e Poussin and Sanskrit Text Edited by Dr. Prahlad Pradhan, Both Translated into English by Dr. Subhadra Jha, K. P. Jayswal Research Institute, Patna, 1983.*

**Bṛ** : Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad→See Ch.

**Ch** : Chāndogya-Upaniṣad→*Aṣṭādaśa-upaniṣadaḥ (Eighteen Principal Upaniṣads)* Vol. 1, Edited by Limaye, V. P. & Vadekar, R. D., Poona, 1958.

**Kaṇ** : *Praśastapādabhāshyatīkāsaṅgrahaḥ, with Kaṇādarahasya of Śaṅkaramiśra*, The Chowkhamba saskrit series no. 231, Benares, 1917.

**Kir** : *Praśastapādabhāṣyam with the Commentary Kiraṇāvalī of Udayanācārya*, Edited by Late Jitendra S.Jetry, Oriental Institute, Vardodara (GOS No. 154), Vadodara, 1991.

**Kir(H)** : *Kiraṇāvalī of Udayanācārya with HINDI translation Edited & Translation by Gaurīnātha Śāstrī*, Research Publication Supervisor, Varanasi, 1980.

**MBh** : *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patanjali, Edited by F. Kielhorn, 4th ed. ; revised and furnished with additional readings, references, and select critical notes by K.V. Abhyankar (3rd ed.), Bhandarkar Oriental Research*



Institute , Poona, 1985.

NBD : *Nyāya Darśana, The sūtras of Gotama and bhāṣya of Vātsyāyana*, The Vrajajivan Prachyabharati Granthamala No.20, Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, Delhi, (Reprint 1987).

NBh : *Gautamiyanyāyadarśana with Bhāṣya of Vātsyāyana*, Edited by Anantalal Thakur, Indian Council of Philosophical Research, New Delhi, 1997.

NS : Nyāyasūtra→See NBh.

NV : *Nyāya Darśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddoyotkara's Vārttika, Vacaspati Miśra's Tātparyaṭīkā and Viśvanātha's Vṛtti*, Chap. 1, Sec. 1 critically edited with notes Taranatha Nyāya-tarkatirtha and Chap. 1-2-5 by Amarendramohan Tarkatirtha, Delhi, 1985 (First Edition, Calcutta, 1936~44).

NK : Nyāyakandalī→See PBh(1).

NKoṣ : *Nyāyakośa or Dictionary of Technical Terms of Indian Philosophy*, by Mahāmahopādhyāya Bhīmācārya Jhalakikar, Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune.

PBh(1) : *The Praśastapāda Bhāṣhya with Commentary Nyāyakandalī of ŚRIDHARA*, Edited by Vindhyasvari Prasad Dvivedin, Banaras, 1895, (Reprint, Delhi, 1984).

PBh(2) : *Nyāyakandalī being a commentary on Praśastapādabhāṣya*, with three sub-commentaries, Edited by Late Dr. J. S. Jetly, and Vasant G. Parikh, Oriental Institute, Vadodara, 1991.

PBh(3) : *Praśastapādabhāṣya (Padārthadharmasaṅgraha) with Commentary Nyāyakandalī by Śrīdarabhata along with HINDI translation*, Edited by Pt. Durugādhara Jhā, Director, Research Institute, Sampurnand Sanskrit Vishvavidyalaya, Varanasi, 1977.

PRKĀ : *Vaiśeṣikadarśana with Praśastapādabhāṣya of Mharṣi Praśastadevāchārya with The 'Prakāśikā' Hindī Commentary by Āchārya Dhuṅḍhirāja Śāstrī and Introduction and Hindī-translation of the Vaiśeṣikasūtras*, by Śrī Nārayaṇa Miśra, THE KASHI SANSKRIT SERIES 173, The Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi, 1966.

SM : *Bhāṣyapariccheda with Siddhāntamuktāvalī by Viśvanātha Nyāya-Pañcānana*, Translated by Swāmī Mādhavānanda with an Introduction, by Dr. Satkari Mookerje, Advaita Ashrama, Calcutta, 1954.

STK : *The Sāṃkhya-tattva kaumudī of Sri Vacaspati Misra*, Edited with the 'Tattva Prakāśikā' Hindī commentary notes and preface, by Dr. Gajanana Sastri Musalagaonkar, The Kashi Sanskrit Series 208, Chaukhambha Sanskrit Sansthan, Varanasi, 1997(Sixth Edition).

SUK : *Praśastapādabhāṣyam with Sūkti on the Bhāṣya Jagadīśa Tarkālaṅkāra*, Edited with Sūktidīpikā and Bengali elucidation etc., by Kālipada Tarkāchārya, Adyāpaka Sanskrit Sanhitya Parishat, THE SANSKRIT SAHITYA PARISHAT, Shyamhazar, Calcutta.

TBh : *Tarka-Bhāṣā of Keśva Mīśra with the commentary Tarkabhāṣāprakāśikā of Cinnāmbhaṭṭa*, Edited by Devadatta Ramkrishna Bhandarkar and Pandit Kedarnāth, Sāhityabhūṣaṇa, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1979(Second Edition).

TS : *Tarakasaṅgraha of Annāmbhaṭṭa with author's own Dīpikā*, and Govardhana's Navya Bodhi, Edited with critical and explanatory notes by the late Yashwant Vasudev Athalye, introduction and English translation of the text Mhadev Rajaram Bodas, Bandarkar Oriental Research Institute, Poona, (Reprint, 1988).

TSD : *Tarkasaṅgrahadīpikā*→See TS.

TTS : *The Tattvasaṅgraha of Ācārya Śantarakṣita with the 'Pañjikā' commentary of Ācārya Kamalaśīlā*, 2 Vols, Edited by Swāmī Dwārikādās Śāstrī, Bauddha Bharati, Varanasi, 1997(Third Edition).

VSC : *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the commentary of Candrānanda*, Critically Edited by Muni Śrī Jambuvijayaji, Oriental Institute Baroda, Baroda, 1982 .

VSU(1) : *The Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the commentary of Śāṅkaramīśra and extracts from the gross of Jayanārāyaṇa*, The sacred books of Hindus series, AMS press, New York, 1974.

VSU(2) : *The Vaiśeṣika Aphorisms of Kaṇāda with comments from the*

*Upaskāra of Śaṅkaramiśra and the Viritti of Jayanārāyaṇa Tarkapañchānana*, Translated by Archibald Edward Gough, Oriental Books Reprint, New Delhi, 1975.

VSD : *Vaiśeṣika Darshana by Kaṇāda Muni with Upaskāra, Viritti and Bhāṣya*, Edited by Barke M. G. Gujarati Printing Press, Bombay, 1913.

Vy (1) : *Vyomavati of Vyomaśivācārya, (2vols.)* Edited by Gaurinath Sastri, M. M. Sivakumāraśāstri-Granthamālā [Vol. 6], Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, Varanasi, 1983~84.

Vy(2) : *Praśastapādabhāṣyam of Praśasta Devāchārya*, with Commentaries (up to Dravya) *Sūktī*-by Jagadiśa Tarkālaṅkāra, *Setu*-by Padamanābha Miśra, and *Vyomavati* by Vyomaśivācārya (to the end), Edited by M. M. Gopinath Kavirāj and Panditraj Dhundhirāj Shāstri, Chowkhamba Sanskrit Series No. 61, Chaukhamba Amarabharati Prakashan, Varanasi, 1983(Second Edition).

WPR : *Word Index to the Praśastapādabhāṣya- A complete word index to the printed editions of the Praśastapādabhāṣya*, by Johannes Bronkhorst and Yves Ramseier, Motilal Banarsidass Publishers Private Limited, Delhi, 1994 .

YS : Yogasūtra →See YSBhVi

YSBhVi : *Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa of Śaṅkara, Vivaraṇa text with English translation, and critical notes along with text and English translation of Patañjali's Yogasūtras and Vyāsabhāṣya*, by T. S. Rukmani, 2 vols, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi, 2001.

『十句義論』 : 『勝宗十句義論』 The Chinese Version ; Appendix of Miyamoto, Keiichi : *The Metaphysics and Epistemology of the Early Vaiśeṣikas*, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1996.

『十句義論』 (大正本) : 『勝宗十句義論』 大正新脩大藏經 第54卷 事彙部(下) ; 外教部 No. 2138

## II 欧文文献

Anikeev, N. P.

[1969] *Modern Ideological Struggle for the Ancient Philosophical Heritage of India*, Indian Studies Past & Present, Calcutta.

Amma, Visweswari

[1985] *Udayana and His Philosophy*, Nag Publishers, Delhi.

Bhaduri, Sadananda

[1947] *Studies in Nyaya-Vaiśeṣika metaphysics*, Bandarkar Oriental Research Institute, Poona (Reprint, 1975).

Bhattacharya, Dineshchandra

[1958] *History of Navya-Nyāya in Mithilā*, Mithilā Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Dharbhanga.

Bhattacharya, Gopinath

[1976] *Tarkasaṃgraha-dīpikā on Tarkasaṃgraha by Annambhaṭṭa*, translated and elucidated by Gopinath Bhattacharya, Progressive Publishers, Calcutta, (Reprint, 1994).

Buch, Erstes

*Die Lehrsprüche der Vaiśeṣika-Philosophie von Kaṇāda*, aus dem Sanskrit übersetzt und erläutert von Dr. E. Röer.

Chakrabarti, Kisor Kumar

[1999] *Classical Indian Philosophy of Mind - The Nyāya Dualist Tradition-*, State University of New York Press, Albany.

Chatterji, Jagadisha Chandra

[1908] *Hindu Realism*, Swastika Publication, Delhi (Reprint, 1975).

Chattopadyaya, D. P.

[1959] *Lokāyata, A Study in Ancient Indian Materialism*, New Delhi.

[1964] *Indian Philosophy, A popular introduction*, people's publishing house, Delhi.

[1967] *Nyāya Philosophy, Literal Translation of Gautama's Nyāya sūtra*



& Vatsyāyana's *Bhāṣya*, along with a free and abridged translation of the Elucidation by Mahāmahopādyaḥ Phanibhūṣaṇa Tarkavāgīṣa, Part I, Calcutta Studies, Calcutta.

[1968] *Nyāya Philosophy, Literal Translation of Gautama's Nyāya sūtra & Vatsyāyana's Bhāṣya*, Part II, Calcutta.

[1972] *Nyāya Philosophy, Literal Translation of Gautama's Nyāya sūtra & Vatsyāyana's Bhāṣya*, Part III, Calcutta.

[1973] *Nyāya Philosophy, Literal Translation of Gautama's Nyāya sūtra & Vatsyāyana's Bhāṣya*, Part IV, Calcutta.

[1976] *Nyāya Philosophy, Literal Translation of Gautama's Nyāya sūtra & Vatsyāyana's Bhāṣya*, Part V, Calcutta.

[1990] *Anthropology and Historiography of Science*, (Reprint, 1992, Motilal Banarsidass, Delhi).

[1975] *Theorien zur Einheit Farbe im Alteren Nyāya und Vaiśeṣika* by Chattopadhyaya, D. P. /Embree, Lester /Mohanty, Jitendranath

[1992] *Phenomenology and Indian Philosophy*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Hilffsaar Wilhelm

Coward, Harold

[1990] *Derida And Indian Philosophy*, SUNY Press, Albany (Reprint, Delhi, 1992).

Dallmayr, Fred

[1996] *Beyond Orientalism - Essays on Cross-Cultural Encounter*, the State University of New York Press, Albany, (Reprint, New Delhi, 2001).

Dasgupta, Surendranath

[1922] *A History of Indian Philosophy* Vol. 1, (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975).

[1932] *A History of Indian Philosophy* Vol. 2, (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975).

[1940] *A History of Indian Philosophy* Vol. 3, (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975).

[1949] *A History of Indian Philosophy* Vol. 4, (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975).

[1955] *A History of Indian Philosophy* Vol. 5, (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1975).

Faddegon, B.

[1918] *The Vaiśeṣika System*, Amsterdam (Reprint, 1969, Wiesbaden).

Frauwallner, Erich

[1956] *Geschichte der indischen Philosophie*, Bd. II, Salzburg.

[1982] *Kleine Schriften*, herausgegeben von Gerhard Oberhammer und Ernst Steinkellner, Wiesbaden.

Gradinarov, P. I.

[1992] *Phenomenology and Indian Epistemology-Studies in Nyāya-Vaiśeṣika Transcendental Logic and Atomism*, Ajanta Books International, Delhi.

Glaserapp, H. v.

[1949] *Die Philosophie der Inder*, Stuttgart.

Grohman, Otto

[1975] "Theorien zur Bunten Farbe im Älteren Nyāya und Vaiśeṣika bis Udayana", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XIX.

Halbfass, Wilhelm

[1975] "Conceptualization of 'Being' in Classical Vaiśeṣika", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XIX.

[1976] "Zum Begriff der Substanz (DRAVYA) im Vaiśeṣika", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XX.

[1979] "Observation of DARŚANA." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XXIII.

[1980] "The Vaiśeṣika Concept of GUṆA and The Problem of Universals", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XXIV.

[1988] *India and Europe, An Essay in Understanding*, SUNY Press, Albany.

[1991] *Tradition And Refraction-Explorations in Indian Thought*, SUNY Press, Albany.

[1992] *On Being And What There is -Classical Vaiśeṣika and the History Of Indian Ontology*, SUNY Press, Albany.

Hattori, Masaaki

[1966] "Studies of the Vaiśeṣikadarśana ( I ) on *Vaiśeṣikasūtra* III. i .13.", *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. XIV No. 2.

[1968-1969] 'Two types of non-qualificative perception', *Beiträge zur Geschichte Indiens, Festschrift für Erich Frauwallner*, *Wiener Zeitschrift*

*für die Kunde Süd und Ost asiens*, XII-XIII.

Hauer, J. W.

[1958] *Der Yoga, Ein Indischer Weg zum Selbst*, W. Kohlhammer, Stuttgart.

Jackson, J. William

[1992] *J. L. Mehta on Heidegger-Hermeneutics & Indian Tradition*, Edited by William J. Jackson, E. J. Brill, Leiden, Netherland.

Jacobi, Hermann

[1895] *The Uttaradhyayana sūtra ; The Sutrakritanga sūtra*, translated from Prakrit by Hermann Jacobi, The sacred books of the East (translated by various oriental scholars, and edited by F. Max Muller) Vol. 45, Oxford University Press, Oxford, (Reprint, Delhi, 1964).

[1901] "Die indische Logik," *Nachrichten von der königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Philologisch-historische Klasse*.

[1911a] "The Dates of the Philosophical Sūtras of the Brahmans," *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 31.

[1911b] "Zur Frühgeschichte der indischen Philosophie," *Sitzungsberichte der Königl. Preußischen Akademie der Wissenschaften*.

Kannu, S. Peeru

[1992] *The Critical Study of Praśastapādabhāṣya*, Kanisika Publishing House, Delhi.

Keith, A. B.

[1921] *Indian Logic and Atomism-an Exposition of the Nyāya and Vaiśeṣika System*, Oxford University Press, Oxford (Reprint, 1977, Motilal Banarsidass, Dehi).

Kumar, Lal Basant

[1973] *Contemporary Indian Philosophy*, Patna (Reprint, 1992, Motilal Banarsidass, Delhi)

Kaviraj, Gopinath

[1924] "The Doctrine of pratibhā in Indian Philosophy," *Annals of Bhandarkar Oriental Research Institute* 5, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

Lysenko, Victoria

[1997] "The Vaiśeṣika Notions of ākāśa and diś from The Perspective of Indian Ideas of Space", *Beyond Orientalism-The Work of Wilhelm Halbfass and its Impact on Indian and Cross Cultural Studies*, Edited by Eli Franco and Karin Preisendanz; *Poznań Studies in the Philosophy of The Sciences and The Humanities*, No. 59, Amsterdam- Atlanta.

Matilal, Bimal Krishna

[1977] *Nyāya-Vaiśeṣika -A History of Indian Literature* vol.VI. 2, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

[1986] *Perception, An Essay on Classical Indian Theories of Knowledge*, Oxford University Press, Oxford (Reprint, 2002).

Miyasaka, Yūko

[1987] "The Definition of vyāpti in Navyanyāya - its nature and construction with reference to Gaṅgeśa and Raghunātha Siromaṇi", *Samhāṣā* vol. 9, Nagoya University, Nagoya.

Miyamoto, Keichi

[1996a] *The Metaphysics and Epistemology of the Early Vaiśeṣikas*, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona.

[1996b]"The Early Vaiśeṣikas on asamavāyikāraṇa and the Term *apekṣ'*", 『インド思想と仏教文化—今西順吉教授還暦記念論集』春秋社

Müller, Friedrich Max

[1852] "Beträge zur Kenntniss der indischen Philosophie.", *Zeitschrift der Deutschen morgenländischen Gesellschaft*, Leipzig.

[1899] *The Six Systems of Indian Philosophy*, (Reprint, AMS Press, New York, 1977).

Neininger, Claudius

[1992] *Aus Gutem Grund Praśastapādas anumāna-Lehre und die drei Bedingungen des logischen Grundes*, Dr.Inge Wezler Verlag für Orientalistische Fachpublikationen, Reinbek.

Nozawa, Masanobu

[1976] "The Vaiśeṣikasūtra referred to in the Padārthadharmasamgraha", *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Japanese Association of Indian And Buddhist Studies, Vol. 24 No. 2.

[1991] "Inferential Marks in the Vaiśeṣikasūtra", *Samhāṣā* vol. 12, Nagoya University, Nagoya.

Parkes, Graham



[1987] *Heidegger and Asian Thought*, University of Hawaii press, Hawaii (Reprint, Motilal Banarsidass, Delhi, 1992).

Potter, Karl H.

[1977] *The Encyclopedia of Indian Philosophy*, Vol. II *Nyāya-Vaiśeṣika*, Motilal Banarsidass, Delhi.

[1994] *Indian Philosophical Analysis, Nyāya-Vaiśeṣika from Gaṅgeśa to Raghunāta Śiromaṇi*, Princeton.

Radhakrishnan, S.

[1923] *Indian Philosophy* Vol. 1, Macmillan Company, New York (Reprint, 1956).

[1927] *Indian Philosophy* Vol. 2, Macmillan Company, New York (Reprint, 1956).

Randle, H. M.

[1930] *Indian Logic in the Early Schools*, Oxford University Press (Reprint, 1976).

Ruben, Walter

[1954] *Geschichte der Indischen Philosophie*, Berlin.

[1971] "Die Gesellschaftliche Entwicklung im Alten Indien IV", *Die Entwicklung der Philosophie*, Akademie Verlag, Berlin.

[1966] *Studies In Ancient Indian Thought*, Indian Studies past & present, Calcutta.

Riepe, Dale

[1961] *The Naturalistic Tradition in Indian Thought*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Sastry, A. M.

[1978] *Dakshinamūrti stotra of Sri Sankaracharya*, Samata Books, 3rd. ed., Madras 1978, pp. 31~32.

Schmithausen, Lambert

[1972] "Zur Lehre von der Vorstellungsfreien Wahrnehmung bei Praśastapāda", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie*, XIV.

Schubring, W.

[1935] *Die Lehre der Jains*, Leipzig.

Schuster, Nancy

[1972] "Inference in the Vaiśeṣikasūtras", *Journal of Indian Philosophy* vol. 1. Reidel Publishing Company, Dordrecht, Holland.

Sharma, Chandradhar

[1952] *A Critical Survey of Indian Philosophy*, (Reprint, 1987, Motilal Banarsidass, Delhi).

Shastri, Biswanarayan

[1993] *Smavāya-Foundation of Nyāya-Vaiśeṣika Philosophy*, Delhi.

Shastri, Dharmendara Nath

[1964] *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika & Its Conflict with The Buddhist Dignāga School*, Delhi (Reprint, 1971).

Singh, B. N.

[1981] *Dictionary Of Indian Philosophical Concepts*, Asha Prakashan, Varanasi.

Smith, Wilfred Cantwell

[1973] *Comparative Religion, Whither and Why? in the History of Religions Essays in Methodology*, New York.

Tachikawa, Musasshi

[1981] *The Structure of the World in Udayana's Realism*, D.Reidel Publishing Company, Netherland.

Türsting, D. G.

[1982] *Über Entstehungsprozesse in der Philosophie des Nyāya-Vaiśeṣika System*, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.

Tuck, Andrew P.

[1990] *Comparative Philosophy and the Philosophy of Scholarship*, New York.

Ui, Hakuju

[1917] *The Vaiśeṣika Philosophy according to the Daśapadārthaśāstra* : Chinese text with introduction, translation, and notes by H. UI, London , Royal Asiatic Society, (Reprint, Varanasi, 1961).

Welzler, Albrecht

[1982] 'Remarks on Definition of 'yoga' in Vaiśeṣika sūtra,' *Indological and Buddhist Studies*, Canberra.

### Ⅲ. 邦文文献

赤松明彦

【1998a】『古典インドの言語哲学』1・2 東洋文庫 637-638 平凡社

【1998b】「認識論 2. インド」広松渉等編『岩波 哲学思想事典』岩波書店

赤松明彦/山上證道

【1988】「ニヤヤー学派の知識論」『岩波講座 東洋思想 第5巻 インド思想 1』岩波書店

浅井茂紀/小沢静男/笹井和夫

【1982】『西洋哲学史—哲学という訳語と哲学史—』高文堂出版社

安達俊英

【1985】「ヴァイシェーシカ・スートラにおけるアートマン」『待兼山論叢』哲学篇・大阪大学文学部

アリストテレス

【1968a】『自然学』岩崎允胤訳（アリストテレス全集 第3巻）岩波書店

【1968b】『形而上学』出 隆訳（アリストテレス全集 第12巻）岩波書店

【1971】『カテゴリー論』山本光雄訳（アリストテレス全集 第1巻）岩波書店

【1999】『アリストテレス 心とは何か』桑子敏雄訳 講談社学術文庫

家永三郎

【1965】『日本近代思想史研究』東京大学出版会（増訂版）

今井知正

【1998】「カテゴリー 1. 西洋【古代】」広松渉等編『岩波 哲学思想事典』岩波書店・1998年

岩崎武雄

【1952】『西洋哲学史』有斐閣（再訂版第27刷1990年）

伊原照蓮

【1993】「バルトリハリにおけるdravyaの概念」『宮坂宥勝博士古稀記念論集』法蔵館

今西順吉

【1990/91/93】「わが国最初の「インド哲学」史講義—井上哲次郎の未公刊草稿—(1)、(2)、(3)」『北海道大学文学部紀要』第39-1、-2、第42-1

宇井伯壽

【1924】『印度哲学研究』第一巻（再版・岩波書店・1982年第二刷）

【1925】『印度哲学研究』第三卷（再版・岩波書店・1982年第二刷）

【1932】『印度哲学史』 岩波書店

内山勝利

【1985】「原子論の誕生」『新・岩波講座 哲学14 哲学の原型と発展 哲学の歴史1』岩波書店

宇野 惇

【1963】「インド知識論における真・偽の考察—正理・勝論学派を中心として—」『哲学研究』第42巻 第四冊（第486号）京都哲学会

【1977/78/79】「新正理学の術語(1)、(2)、(3)」『広島大学文学部紀要』第37、38、39巻

【1980】「正理・勝論学説研究」『広島大学文学部紀要』特輯号1

【1989】「勝論学派の〈pāka-ja〉説」『インド哲学と仏教—藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店

ヴィンテルニッツ, M

【1973】中野義照訳『インドの学術書』（インド文献史 第六巻）日本インド学会

エーコ, U

【1976】池上嘉彦訳『記号論』I・II（岩波書店, 1980年）

【1977】谷口勇訳『論文作法・調査、研究、執筆の技術と手順』（而立書房, 1991年）

【1984】谷口勇訳『テキストの概念・記号論、意味論、テキスト論への序説』（而立書房, 1993年）

【1992】柳谷啓子・具島靖訳『エーコの読みと深読み』（岩波書店, 1993年）

大綱 功

【1985】「古代インドにおけるVaiśeṣika学派の運動論」『科学史研究』第24巻 (No. 156)

【1987】「古代インドにおけるVaiśeṣika学派の運動論II」『科学史研究』第26巻 (No. 162)

【1992】「インド運動論の原典翻訳I」『東洋大学工学部教養課程紀要』第28号

【1993】「古代インドにおけるVaiśeṣika学派の運動論と業の理論の比較」『科学史研究』第32巻

【1994a】「インド運動論の原典翻訳II」『アジアにおける宗教と文化（東洋学研究第31号）』東洋大学東洋学研究所

【1994b】「Vaiśeṣika学派におけるインド運動論の展開」『科学史研究』第33巻

【1995】「ヴァイシェーシカ学派における「〈世界の〉創造と破壊」の原典翻訳」『東洋学研究』第32号, 東洋大学東洋学研究所

【1996】「古代インドにおけるニヤーヤ, およびヴァイシェーシカ両学派の音の伝播論」『科学史研究』第35巻 (No.198)



【1999a】「インド運動論の原典翻訳-パダールタダルマサンガラハおよびその注釈書ニヤーヤカンダリー-第3章”運動”(karman)の翻訳」平成10年東洋大学国内特別研究・東洋大学工学部

【1999b】「インド運動論と因果論」『科学史研究』第38巻 (No.211)・日本科学史学会・岩波書店

大石 学

【1995】「意味基盤としての「意図」について」『東洋大学大学院紀要』第31集・文学研究科編

大橋容一郎

【1998】認識論 1. 西洋」広松渉等編『岩波 哲学思想事典』岩波書店

大森荘蔵

【1992】『時間と自我』青土社

【1993】『時間と存在』青土社

【1996】『時は流れず』青土社

小川英世

【1986】「Kaṇḍabhaṭṭaのbhāvapratyaya 論」『広島大学文学部紀要』第45巻

【1990】「行為と言語～サンスクリット意味論研究：動詞語根の意味」『広島大学文学部紀要』特輯号

カッシーラ, E

【1910】『実体概念と関数概念-認識批判の基本的諸問題の研究-』山本義隆訳 みすず書房 1979年

金倉円照

【1963】『インド哲学史』平楽寺書店

【1971】『インドの自然哲学』平楽寺書店

木村泰賢

【1917】『印度六派哲学』丙午出版社

【1930】『印度哲学仏教思想史』甲子書房

桂 紹隆

【1977】「因明正理門論研究(一)」『広島大学文学部紀要』37巻

【1982】「Kumārilaの推理論-Dignāgaとの対比-」『印度学仏教学研究』第31巻1号

【1986】「インド論理学における遍充概念の生成と発展-チャラカ・サンヒターからダルマキールティまで-」『広島大学文学部紀要』第45巻 特輯号1

【1998】『インド人の論理学』中公新書

加藤信朗

【1996】『ギリシア哲学史』東京大学出版会

金岡秀友

【1980】「『ウ・アイシェーシカ・スートラ』試訳」（『東洋学論叢—東洋大学文学部紀要・印度哲学科中国哲学文学科篇』第33輯）

【1990】『インド哲学史概説』（新装版）佼成出版社

狩野 恭

【1987】「ātmanの存在論証—kevalavyatirekinの2形式—」『印度学仏教学研究』36巻第1号

【1996】「初期ヴァイシェーシカ学派におけるアートマンの存在論証」『宗教研究』第69巻第4集（307号）

川崎信定

【1984】「一切智者の存在論証」『講座・大乘仏教9 認識論と論理学』春秋社

岸本英夫

【1961】『宗教学』大明堂（再版1988年）

北川秀則

【1973】『インド古典論理学の研究-陣那（Dignāga）の体系-』鈴木学術財団

クワイン, W.V.O.

【1980】『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』飯田隆訳 勁草書房・1992年

高坂正顕

【1969】『明治思想史』「高坂正顕著作集」第七巻、理想社

三枝充憲

【1977】『講座 仏教思想 第1巻 存在論・時間論』理想社（第3刷）

佐保田鶴治

【1979】『ウパニシャッド』平河出版社

定方晟

【1972】「勝論の起源とアリストテレス哲学」『印度学仏教学研究』第21巻第1号

【1973】『須弥山と極楽』講談社現代新書（1993年第27刷）

島蘭進

【1998】「宗教 【宗教の定義】」『岩波 哲学思想事典』岩波書店

シュトラウス, オットー

【1979】『インド哲学』（湯田豊訳）大東出版社

末木剛博

【1969】『東洋の合理思想』講談社現代新書・1969年（第7刷1980年）

菅沼 晃

【1985】『インド神話伝説辞典』東京堂書店

高崎直道

【1993】「最近十年の仏教学－仏教思想学会発足十年に因んで－」 『仏教学』  
36号

立川武蔵

【1992】『はじめてのインド哲学』（講談社現代新書）・講談社

竹中智泰

【1974】「インド実在論学派の普遍論－普遍の実在論証および普遍と個物の関係  
－」 『東方学』第48集・東方学会

辻 直四郎

【1967】『インド文明の曙－ヴェーダとウパニシャッド－』岩波新書、岩波書店

デカルト, R.

【1637】野田又夫訳『方法序説』（中央公論社・世界の名著27, 1978年）

【1641】井上庄七・森啓訳『省察』（中央公論社・世界の名著27, 1978年）

【1644】井上庄七・水野和久訳『哲学の原理』（中央公論社・世界の名著27,  
1978年）

ドゥルーズ, G.

【1956】『差異について』平井啓之訳 青土社 1992年（1996年 第3刷）

【1966】『ベルグソンの哲学』宇波彰訳 法政大学出版会 1974年（1993年  
第11刷）

中島義道

【1996】『時間を哲学する』講談社現代新書

中根洋雅

【1997】「バルトリハリの<直観説>-pratibhāをめぐって-」 『東洋大学大学院紀  
要』第34集

中村 元

【1950】『初期のヴェーダーンタ哲学-初期ヴェーダーンタ哲学史 第1巻-』岩  
波書店（1981年第3刷）

【1951】『ブラフマ・スートラの哲学』岩波書店

【1958】『国訳 勝宗十句義論』（国訳一切経 和漢選述43 論疏部23）大東  
出版社

【1960】『比較思想論』（岩波全書247）岩波書店（第19刷）

- 【1967】『インド思想の諸問題』春秋社  
 【1968】『インド思想史（第2版）』岩波書店  
 【1975】『普遍思想』上巻 中村元選集 第18巻 春秋社  
 【1977/78】「ウ` アイシェーシカ学派の原典」『三康文化研究所年報』10.11  
 (Vaiśeṣika-sūtraとPadārthadharmasaṅgraha)

- 【1981a】「ウ` アイシェーシカ哲学における〈普遍〉と〈特殊〉」『大乘仏教から密教へ・勝又俊教博士古稀記念論集』  
 【1981b】「インド論理学の理解のためにⅠ-ダルマキールティ『論理学小論(Nyāyabindu)-』『法華文化研究』7号・立正大学法華文化研究所  
 【1983】「インド論理学の理解のためにⅡ インド論理学・術語集成-邦訳の試み-」『法華文化研究』9号・立正大学法華文化研究所  
 【1986】『自我と無我-インド思想と仏教の根本問題-』平楽寺書店

新田義弘

- 【1989】『哲学の歴史』講談社現代新書、講談社  
 【1992】『現象学とは何か』講談社学術文庫、講談社  
 【1993】『現象学運動』岩波講座、現代思想第6巻（編著）、岩波書店

野沢正信

- 【1979】「プラシャスタパーダの似因説」『印度学仏教学研究』第28巻第一号  
 【1980】「ウ` アイシェーシカにおける生死について」『日本仏教学会年報』第46号  
 【1982】「カーシャパはヴァイシェーシカか」『印度学仏教学研究』第29巻第二号  
 【1987】「『ウ` アイシェーシカ・スートラ』の構成と元素説」『印度哲学仏教学』第02号、北海道印度哲学仏教学会  
 【1988a】「Vaiśeṣikasūtra 3-2-6~14 の推論説」『印度学仏教学研究』第37巻第一号  
 【1988b】「『ウ` アイシェーシカ・スートラ』2-2-15と第2章の構成」『印度哲学仏教学』第03号、北海道印度哲学仏教学会  
 【1989a】「『ウ` アイシェーシカ・スートラ』第2-1章の推論説」『インド哲学と仏教-藤田宏達博士還暦記念論集』  
 【1989b】「『ウ` アイシェーシカ・スートラ』3-1-14の解釈をめぐって」『印度哲学仏教学』第04号、北海道印度哲学仏教学会  
 【1990】「『ウ` アイシェーシカ・スートラ』4-1-1~15の形而上学説」『印度哲学仏教学』第05号、北海道印度哲学仏教学会  
 【1997a】「ヴァイシェーシカは自然哲学か」『印度哲学仏教学』第12号  
 【1997b】「ヴァイシェーシカ学派の自然観」(<http://lapc01.ippan.numazu-ct.ac.jp/c/contents.htm>)  
 【1999a】「ヴァイシェーシカ学説における分離について-『パダールタ・ダルマ・サングラハ』「分離の章」和訳解説-」『印度哲学仏教学』第14号  
 【1999b】「書評・村上真完著『インドの実在論』」『印度哲学仏教学』第14号  
 【2000】「ニヤーヤ学派に言及される初期ヴァイシェーシカ学派の輪廻説」『印



ハイデッガー, M

【1927】細谷貞雄訳『存在と時間・上下』（ちくま学術文庫, 1994年）

泰本 融

【1976】『東洋論理の構造～ニヤーヤ学説の研究～』法政大学出版局

服部正明

【1969】「ウパニシャッド」『世界の名著1 パラモン教典・原始仏典』中央公論社

【1985】「インドの自然観」新岩波講座 哲学 5 「自然とコスモス」岩波書店

【1988】「ウ・アイシェーシカ学派の自然哲学」『岩波講座 東洋思想』第5巻

【1996】「ヴァイシェーシカ體系における宗教性的の問題」『東方学』第94輯pp. 1~14

早島鏡正／高崎直道／原 実／前田専学

【1982】『インド思想史』東京大学出版会

原 佑

【1955】『西洋哲学史』東京大学出版会（第3版1992年）

林達夫

【1971】『哲学事典』平凡社（第23刷1992年）

菱田邦男

【1993】『インド自然哲学の研究』山喜房仏書林

平川彰

【1974/1979】『インド仏教史』上・下, 春秋社

平野克典

【1998】「『ヴィヨマヴァティー』における普遍の定義」『東海仏教』第43輯

【2002】「ヴァイシェーシカ哲学における普遍の定義-*Padārthadharma-saṃgraha*の場合-」『南都佛教』第82號

ブルデュー, P

【1973】『社会学者のメチエ』田原音和・水島和則訳（藤原書店, 1993年）

ベルグソン, H.

【1889】『時間と自由』平井啓之訳 白水社 1990年（1997年 第7刷）

【1922】『持続と同時性』花田圭介・加藤精司訳（ベルグソン全集3）白水社（1977年 第7刷）

北條賢三

- 【1967】「勝論学派の無句義（1）」『大正大学研究紀要』第52輯  
【1968】「勝論学派の無句義（2）」『大正大学研究紀要』第54輯  
【1971】「勝論学派の解脱説」『大正大学研究紀要』第56輯  
【1978】「法住著『勝宗十句義論記』に就いて—江戸後期に現れたインド哲学研究の曙光—」『大正大学研究紀要』第64輯  
【1981】「勝論学説における倫理観の変遷」『大正大学研究紀要』第66輯  
【1991】「ウ`アイシェーシカ哲学に見られる人間観」『東北大学印度哲学仏教学講座65周年記念論集』平楽寺書店

本多 恵

- 【1967】「ヴァイシェーシカ」『講座 東洋思想』第1巻「インド思想」東京大学出版会（第11刷、1981年）  
【1986】「ウ`アイシェーシカ・スートラ覚書」『印度学仏教学研究』第35巻第一号, pp. 429~435  
【1988】「ウ`アイシェーシカ・スートラ覚書」『印度学仏教学研究』第37巻第一号, pp.467~472  
【1990】『ウ`アイシェーシカ哲学体系』 国書刊行会  
【1994】「『勝論経』自我章の考察」『東海仏教』第39集・東海印度学仏教学会

前田専学

- 【1978】「ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ哲学と因果論」『仏教思想—因果論』仏教思想研究会編・平楽寺書店

丸井 浩

- 【1981】「ニヤーヤ・ウ`アイシェーシカ学派における実体の知覚条件について」『印度学仏教学研究』第28巻第二号  
【1985】「Vaiśeṣikasūtra 4. 1. 6の研究（1）」『仏教文化』14-17

宮坂宥勝

- 【1954】「清弁引用のヴァイシェーシカ哲学説」『文化』第18巻 第三号 東北大学文学会  
【1956】『ニヤーヤ・パーシュヤの論理学』山喜房仏書林  
【1983】『インド古典論』上 筑摩書房  
【1984】『インド古典論』下 筑摩書房

宮元啓一

- 【1975】「インド自然哲学の研究—ウ`アイシェーシカ学派のpākajottpatti 理論—」『宗教研究』 225号  
【1976】「ウ`アイシェーシカ学派の数体 (saṃkhyā) 論」『東洋学報』第57巻第3・4号, 東洋文庫  
【1977】「Vaiśeṣika学派のapekṣābuddhi」『印度学仏教学研究』第25巻第2号 日本印度学仏教学会  
【1982a】「suvarūpaとviśeṣaṇa-Praśastapādaのpratyakṣa論」『仏教教理

の研究-田村芳朗博士還暦記念論集』春秋社・1982年・513-526頁。

【1982b】「知識の真偽の根拠—インド論理学派の知識論をめぐって」『法政大学教養部紀要・人文科学編』

【1985】「ārambhavāda覚え書き」『仏教思想の諸問題—平川彰古稀記念論集』春秋社

【1987】「ニヤーヤ・ウ` アイシェーシカ学派の人間概念」専学編『東洋における人間観』東京大学出版会

【1989】「時間・空間・因果性」『インド思想3』岩波講座 東洋思想 第7巻, 岩波書店

【1991a】「アートマンの大きさ—初期ヴァイシェーシカ学派の見解をめぐって—」『国学院雑誌』第92巻第5号

【1991b】「初期ヴァイシェーシカ学派におけるアートマンの運動」『国学院雑誌』第92巻11号

【1991c】「初期ヴァイシェーシカ学派のアートマン観」『<我>の思想—前田専学博士還暦記念論集』春秋社

【1997】「勝宗十句義論における二種の推論」『印度哲学仏教学』第12号

【1998】「初期ヴァイシェーシカ学派の接触論」『インド思想史研究』第10巻・インド思想史学会

【1999a】「新・国訳 『勝宗十句義論』」國学院大学紀要 第35巻

【1999b】『牛は実在するのだ！—インドの実在論哲学『勝宗十句義論』を読む』青土社

【2001】「『勝宗十句義論』を中心に見たヴァイシェーシカ哲学概史」『印度哲学仏教学』第16号pp. 49~60

【2002】『インド哲学七つの難問』講談社選書メチエ255・講談社

茂木秀淳

【1988】「初期ヴァイシェーシカ学派のアートマン観」岩波講座 東洋思想『インド思想2』岩波書店

村上真完

【1974】「ウ` アイシェーシカ・スートラにおけるアートマン」『印度学仏教学研究』第23巻第二号

【1975a】「ウ` アイシェーシカ哲学のアートマン」『東北大学日本文化研究所研究報告』第12集

【1975b】「ウ` アイシェーシカ哲学におけるアートマン存在の論証」『東北大学文学部研究年報』第25巻

【1976】『サーンクヤ哲学研究—インド哲学における自我観』春秋社

【1977】「サーンクヤ哲学研究における業、法・非法とウ` アイシェーシカ哲学」『論集』第04号、東北印度学宗教学会

【1986】「ウ` アイシェーシカ（勝論）派の認識論と言語表示」『東北大学文学部研究年報』第36巻

【1989】「概念とその対象—ウ` アイシェーシカ（勝論）の普遍の意味」『インド哲学と仏教—藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店

【1990】「インド自然哲学における人間観」『東北大学印度哲学仏教学講座65周年記念論集』

【1991a】「ヴァイシェーシカ派とニヤーヤ派における無分別の直接知覚」『伊原照蓮博士古稀記念論文集』九州大学

【1991b】「インド自然哲学における人間観」『東北大学印度学講座65周年記念論集』

【1991c】『インド哲学概論』平楽寺書店1992』『インド哲学概論』平楽寺書店

【1993】「インドの主観的観念論—知覚創出説 (dṛṣṭ-srṣṭi-vāda)」『宮坂宥勝博士古稀記念論集』法蔵館

【1995】「精神性をめぐる諸理論」『東北大学文学部研究年報』第45巻

山口義久

【2001】『アリストテレス入門』ちくま新書（筑摩書店）

山折哲雄

【1996】「やせ細った「仏陀」」『近代日本人の宗教意識』岩波書店

山田道夫

【1998】「原子論 1西洋【古代・中世】」『岩波哲学・思想事典』岩波書店

山鳥 重

【1998】「脳と記憶」『談』1998年春号 (No.58) 特集：記憶と他者 pp.14~27・たばこ総合研究センター (TASC)

湯田 豊

【1975】「因果律の問題—インド的質量因の探求」『東方学』第49輯

【1978】『インド哲学の諸問題』大東出版社

【1981】「ヴァイシェーシカ哲学」『人文研究』No. 70・神奈川大学人文学会

【1992】『バラモンの精神界』すずき書店

【1994a】『インド哲学のプロムナード』大東出版社

【1994b】「インド哲学の理論的枠組みの組替えについて」『現代思想』1994年6月号

【2000】『ウパニシャッド—翻訳と解説—』大東出版社

横山雅彦

【1998】「原子」『岩波哲学・思想事典』岩波書店

吉本秀之

【1998】「元素」『岩波哲学・思想事典』岩波書店所収

ロック, J.

【1689】『人間知性論』大槻春彦訳 中央公論社（世界の名著）1961年  
桑子敏雄（訳）

ルーマン・N

【1977】『宗教社会学—宗教の機能—』土方昭・三瓶憲彦共訳 新泉社 1989



年

渡辺照宏

【1982】「玄奘訳「因明入正理門論」について」『渡辺照宏仏教学論集』筑摩書房

和田壽弘

【1989a】「インド新論理学派における制限者 (avacchedaka) (1)」『東海仏教』第34集

【1989b】「インド新論理学派における制限者 (avacchedaka) (2)」『名古屋大学文学部研究論集 (哲学)』

【1990】「インド哲学における言語分析 I」『名古屋大学文学部研究論集 (哲学)』

【1993】「ヒンドゥー実在論哲学の世界の構造と周期」立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』佼成出版社,



